



二葉保育園 120周年記念誌

子どもと共に育つ
子どもと共に生き

二葉保育園 120 周年記念誌

目 次

120 周年記念会 式次第	1
記 念 礼 拝.....	2
野口幽香賞贈呈式.....	3
記念講演 「神の愛と子ども」 佐藤 優氏	4
実 践 報 告	
二葉乳児院	
「二葉乳児院における里親家庭支援とこれからの『乳児院機能』の展望」.....	10
二葉南元保育園	
「この地に根付いた保育実践 古き二葉を訪ね、未来を描く～二葉の歴史は『南元』が原点～」	15
二葉学園	
「小規模化・地域分散化児童養護施設の実践、そしてこれからの二葉学園」.....	21
二葉くすのき保育園	
「くすのきのもとに育つ子どもたち」.....	26
二葉むさしが丘学園	
「二葉むさしが丘学園 10 年のあゆみ～子どもとともに、地域とともに～」	32
自立援助ホーム トリノス	
「自立援助ホーム トリノスでの 4 年間の実践を通しての考察」	37
社会福祉法人二葉保育園の歴史.....	42
120 周年記念会アルバム	43

社会福祉法人二葉保育園 120 周年記念会

2020 年 2 月 1 日

I 120 周年記念式

10～12 時 日本キリスト教団 番町教会

- 1 記念礼拝 日本キリスト教団 東中野教会 浦上 充牧師（司式）
- 2 主催者挨拶社会福祉法人二葉保育園 理事長 井上 従子
- 3 来賓祝辞 東京都福祉保健局 少子社会対策部長 谷田 治氏
新宿区長 吉住 健一氏
- 4 野口幽香賞贈呈式
- 5 記念講演
「神の愛と子ども」 佐藤 優氏

II 実践報告会

※下線は当日の発表者

13 時 30 分～15 時 15 分 プラザ F 7 階カトレア

- 1 二葉南元保育園 「この地に根付いた保育実践 古き二葉を訪ね、未来を描く
～二葉の歴史は「南元」が原点～」
メンバー 高橋陽子、西山葵、山崎雅世、浦澤康仁
アドバイザー 社会福祉法人二葉保育園 遠藤久江前理事長
- 2 二葉くすのき保育園 「くすのきのもとに育つ子どもたち」
メンバー 中村由紀、中野志穂、蒔田結奈、酒井奈美江、竹下玉美
アドバイザー 二葉くすのき保育園 八木澤真理子前園長
- 3 二葉乳児院 「二葉乳児院における里親家庭支援とこれからの「乳児院機能」の展望」
メンバー 二葉・子どもと里親サポートステーション主任 長田淳子
アドバイザー 青山学院女子短期大学 横堀昌子教授
- 4 二葉学園 「小規模化・地域分散化児童養護施設の実践、そしてこれからの二葉学園」
メンバー 星直倫、赤瀬正樹、松井夏子
アドバイザー 大正大学 高橋一弘教授
- 5 二葉むさしが丘学園 二葉むさしが丘学園 「10 年間のあゆみ～子どもとともに地域とともに～」
メンバー 里親支援専門相談員 高橋和子
アドバイザー 白梅学園短期大学 中山正雄教授
- 6 自立援助ホーム トリノス 「自立援助ホーム トリノスでの 4 年間の実践を通しての考察」
メンバー 上原みなみ、渡辺剛史、宮崎澄人、金崎慎太郎
アドバイザー 十文字学園女子大学 潮谷恵美教授

III 交流会

15 時 30 分～17 時 プラザ F 9 階すずらん

社会福祉法人 二葉保育園 120周年 記念礼拝

2020年2月1日(土) 10:00~10:30

日本基督教団 番町教会

司式: 浦上 充 (日本基督教団 東中野教会 牧師)

奏楽: 茂呂 淳子 (日本基督教団 番町教会 ルガニスト)

《招かれて集う》

前奏

招きの詞

挨拶

讚美歌 「やさしいめが」(こどもさんびか改訂版114)

《神の語りかけを聞く》

聖書 マタイによる福音書 7章7節~12節

説教 「二葉保育園が求めてきたもの」

浦上 充(東中野教会 牧師)

《 奉 献 》

120周年の祈り

主の祈り

讚美歌 「ひかりのこになるため」(こどもさんびか改訂版121)

《違わされて出かけて行く》

派遣と祝福

後 奏

招きの言葉

司式者と会衆が交互に読み交わします。皆さん(参列者)は、「会衆」と書いてある字が下がっている部分をお読みください。

司式者 てん かみ えいこう ものがた
天は神の栄光を物語り

会衆 おおぞら み て わざ しめ
大空は御手の業を示す。

司式者 ひる ひる かた つた
星は昼に語り伝え

会衆 よる よる ちしる おく
夜は夜に知識を送る。

司式者 はなす ことば
話すことも、語ることもなく、声は聞こえなくても

会衆 その 言葉は 世界に 果てに 向かう。
その言葉は世界に果てに向かう。

司式者 そこに、 神は 太陽の 幕屋を 設けられた。
そこに、神は太陽の幕屋を設けられた。

司式者 たいよう はなむこ てんがい
太陽は、花婿が天蓋から出るように

司式者 ゆうし よるこ いさ みち
勇士が喜び勇んで道を走るように

会衆 てん は て い た
天の果てを出で立ち、
てん は て め ざ ち
天の果てを目標して行く。(詩編 19編)

司式者 じょうもん あたま あ
城門よ、頭を上げよ

司式者 とこしえの 門よ、身を起こせ。
とこしえの門よ、身を起こせ。

司式者 えいこう かがや おう こ
栄光に輝く王が来られる。

会衆 えいこう かがや おう だれ
栄光に輝く王とは誰か。

司式者 つよ おお しゅ おお たか
強く雄々しい主、雄々しく戦われる主。

会衆 じょうもん あたま あ
城門よ、頭を上げよ

司式者 とこしえの 門よ、身を起こせ。
とこしえの門よ、身を起こせ。

司式者 えいこう かがや おう こ
栄光に輝く王が来られる。

司式者 えいこう かがや おう だれ
栄光に輝く王とは誰か。

会衆 ばんぐん しゅ しゅ えいこう かがや おう
万軍の主、主こそ栄光に輝く王。(詩編 24編)

聖書

司会者 主は皆さんと共に

会衆 また、あなたと共に

司会者 福音書の朗読は、マタイによる福音書 7章7節から

12節まで。

マタイによって記された、主イエス・キリストの福音。

7 もと 「求めなさい。そうすれば、あた さが 与えられる。探しなさい。

そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開

かれる。8 だれでも、 求める者は受け、探す者は見つけ、門

をたたく者には開かれる。9 あなたがたの だれが、パンを欲し

がる自分の子供に、石を与えるだろうか。10 魚を 欲しがる

のに、蛇を与えるだろうか。11 このように、 あなたがたは悪

い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを

知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良

い物をくださるにちがいない。12 だから、 人にしてもらいた

いと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこ

そ律法と預言者である。」

司会者 我らの主、イエス・キリストの福音。

会衆 キリストに賛美。

主の祈り

司式者 共に主の教えを守り み言葉に従い、つつしんで

主の祈りをささげましょう。

会衆一同 てん かがや われ うち
天にまします我らの父よ、

ねがわくはみ名があがめさせたまえ。

み国を来たらせたまえ。

みこころの天になるごとく、

地にもなさせたまえ。

われ にちよう かに 我らの日用の糧を、きよう あた 今日も与えたまえ。

われ つみ 我らに罪をおかす者を我らがゆるすごとく、

われ つみ 我らの罪をもゆるしたまえ。

われ あく 我らをこころみにあわせず、

悪より救い出したまえ。

くに さか 国とちからと栄えとは、

限りなくなんじのものなればなり。

アーメン。

派遣と祝福

司式者 主は皆さんと共に。

会衆 また、あなたと共に。

司式者 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同の上に豊かにありますように。

会衆 アーメン。

著作権 版権許諾一覽

「聖書

新共同訳」 共同訳聖書実行委員会 Executive Committee of The Common Bible Translation

© 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987,1988

「こどもさんびか改訂版」

© 日本基督教団讚美歌委員会 日本キリスト教団出版局、2002年。

日本キリスト教団出版局 楽譜版下使用許諾 No. 020-031

JASRAC 出 許諾 2001118-001

野口幽香賞贈呈式

受賞者

片野 清美氏（エイビイシイ保育園施設長）



片野清美さんの受賞挨拶



選考委員長（遠藤久江前理事長）による講評

選考理由

エイビイシイ保育園は、1983年に無認可保育施設として東京新宿の繁華街として有名な歌舞伎町にほど近い大久保のビルの一室で始まりました。この地域ですので、預ける親のニーズに合わせると保育時間は24時間とせざるを得ませんでした。夜間保育への偏見や非難と闘いながら、困っている人を助けたいとの思いで産休明け保育、夜間・深夜保育、休日保育、夜間学童保育、ショートステイ等を実施しています。2001年4月には東京都ではじめての24時間開所の認可保育所となりました。

片野清美氏はこれらの事業のリーダーとして強い使命感と熱意をもって歩んでこられました。24時間眠ることのない現代社会を象徴するかに思える都心のこの地域にあっても、安心して子育てをしてほしいとの思いから、親と子の生活に向き合い、子育てを支え、心身共に健康な乳幼児の成長を目指しての実践を積み重ねてこられました。

120年前に野口幽香は貧しく、放置されていた子どもたちを見過ごすことができず、この子どもたちを若芽の二葉から、愛と慈しみをもって、たくましい木々になるように育てていきたいとの強い決意で、貧民のための二葉幼稚園を開設しました。片野 清美氏とその働きを支えている方々の活動はこの野口幽香の精神に通じるものがあります。

〔野口幽香賞選考委員会 遠藤 久江委員長〕

野口幽香賞

野口 幽香（1886～1950年）が、貧しく恵まれない子ども達のために生涯にわたって力を尽くし、我が国の児童福祉の先駆けとなる取り組みを行った功績を後世に伝えるとともに、乳幼児の福祉増進に資する活動・調査研究を顕彰するために創設。

記念講演 「神の愛と子ども」

講師：佐藤 優氏

① はじめに

～わたしと社会福祉法人二葉保育園～

今回「神の愛の子ども」というテーマを頂きました。そこで、野口幽香先生という非常にユニークな先生の原点についてお話したいと思います。

と言っても率直に言って、現在の二葉保育園ってそんな基督教の匂いはしないですよ。でも今基督教の匂いがそんなにしなくても、基督教的な考え方では「受肉」すなわち「肉体化している」ということがもっとも重要だと思います。

私が同志社大学の大学院神学研究科を出た頃は、一学年40人で洗礼を受けている人は6人でした。今は一学年60人ですが洗礼を受けている人は2人か3人です。神学部ですら世俗化しています。ただし基督教的な考え方を生かして社会で活躍していく若い人たちはたくさん出ています。

② 聖書の教え

～子どもを大切にする心～

子どもとの関係で聖書の「マルコによる福音書」10章の13節から16節を読みます。

イエスに触れていただくために、人々が子どもたちを連れてきた。弟子たちはこの人々を叱った。

イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。

「子どもたちを私のところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。よく言うておく。子どものように神の国を受け入れる人でなければ決してそこに入ることはできない。」

そして子どもたちを抱き寄せ手を置いて祝福された。

この時イエス・キリストは怒っているわけです。



イエスのところに子どもたちが来る。おそらくはその子どもたちは貧しい子ども、汚れている子どもたちです。

「あっち行け」と弟子たちは言うのですね。ところがイエスは怒って「何言うんだ」と。

「子どもたちを来させなさい」と。子どもたちを大切にしろというのは我々基督教徒にとっては絶対的に重要なのです。なんでかという、そうだからなのです。一番重要なことは実は理由はないのです。

実は宗教にはそういう強さがあります。生産性に役立つからとか、あるいは、子どもの頃から養護をした方が将来犯罪率が低くなって、そういう社会的なコストが云々ということを経済学者とかが言うのですがそんなことは第二義的意味しか持ちません。命は命だけで価値があると、なぜならば、我々はイエス様からそう言われているからです。野口幽香もきっとそういう考えの人だったと思います。

③ 野口幽香と基督教信仰について

～佐藤優先生自身の歩みと重ねながら～

野口先生は1866年生まれて1950年に亡くなりました。1900年の1月、麴町下六番町に二葉幼稚園

を設立して今年で120年です。2月1日、今日が幽香先生の誕生日ですね。その11年前1889年5月に本郷森川町講義所でプロテスタントの洗礼を受けました。その後、生涯キリスト教信仰を持っていました。

イエス・キリストは一人だから本来教会は一つであるべきだと。だから正しい信念に従って活動するという意味で、野口幽香先生はプロテスタントの各教会はもとより、カトリックとか聖公会とかそういった枠も越えるスケールの大きな人でした。

私はキリスト教で非常に重要なのは「召命観」という考えだと思うのです。

「私はこの道なんだ。このことをやっていくんだ。」何に突き動かされているかは自身にも分からない。こういう人と会うとどうなると思います？おそらく片野先生（注：野口幽香賞受賞者）は他の人に「私と同じことをやれ」という決断は迫らないのです。片野先生の姿を見ていると感化を受けていくのです。それでこういう仕事をやりたいと思っていく。私は二葉で働いてる人達の姿から影響を受けます。

私はもともと外交官でした。18年前に鈴木宗男事件があり拘置所に入った。なぜそういうことになったのかと言えば、北方領土問題を一生懸命やりすぎたからです。でも、当初、私は北方領土問題に取り組む気が全然なかったのです。外交官になった経緯を話します。

高校時代、私はマルクス主義に関心を持っていたので「神様はいない」という研究をするために同志社大学の神学部に入りました。でも、同志社の先生もよく知っているのですね。半年ぐらいで信者になると。真面目に取り組むとそうになってしまうのです。私もその一人です。

ラインホルドニーバーという学者や、ナチスと抵抗して死刑になってしまった神学者ディートリッヒ・ボンヘッファー、そして20世紀のおそらく最大の神学者カール・バルトの研究をしました。でも、しっくりこない。

旧約聖書神学者の野本真也先生にヨゼフ・ルクス・フロマートカという共産主義国チェコスロバキアの神学者の存在を教えてくださいました。野本先生はその後、私の指導教授になり、いま私はその先生の教会に通っています。

フロマートカは「対話によって人は変わっていく」という信念の人です。その人の研究をしたくなっただけですが、資料が少ないし留学はできない。どうしても行きたいと思っていたら、ある時、外交官になれば行けると気がついて外交官になりました。しかし、チェコに行けるかと思っていたら、直前の3月になってソ連に行ってくれと言われてしまいました。

ソ連では、モスクワ大学の科学的無神論学科が神様の研究をやっていました。ロシア人というのは、その当時共産主義の中で、神様を信じている。その二重構造が面白くなって、そういう人たちに人脈を作っていたら、エリツィン大統領の側近になり、北方領土交渉にだんだん巻き込まれていきました。でも、今になって考えてみると、やっぱり私の召命というのは人生の前半は外交の仕事でした。後半の人生は「作家」という仕事です。特に子どもたちの未来のために何ができるか。

野口幽香先生にも「召命」がありました。「召命」は必ず個人の名前が呼ばれます。ただ本人にしか聞こえない。だから周りから見ると妄想のように見えるかもしれない。そして、「これをやれ」って言われる。従うか拒否するかです。

4 野口幽香の召命

～神に使命を与えられた時～

1914年8月15日、摩耶山。野口幽香は兵庫県神戸市の山に籠っていた。彼女はその頃学習院の仕事や、二葉の仕事もしていた。行き詰まって山に籠った。その時に神様の声が聞こえたというのです。

旧約聖書「出エジプト記」3章1節～14節には、神が姿を現し、モーセにイスラエルの民を救い出すという使命を与えるというシーンがあります。11節



野口・森島先生

にはこうあります。

神は言われた。

「わたしはあなたと共にいる。これはわたしがあなたを遣わす印である。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたがたはこの山で神に仕えることになる。」

野口幽香は摩耶山で神様の声が聞こえて、私の任務があると強く確信したというのです。

話が前後しますが、森島峰先生と野口幽香先生がこの二葉幼稚園を作る時に『私立二葉幼稚園設立趣意書』というのを書いています。いくつか引用します。

「不幸の谷間にある貧児らを悪の道に走らせる前に、よき環境に置き、教育を施し、良き国民と為すことは、実に吾等同胞の義務」

「ただ保育を受ける者とその両親たちの幸福だけでなく、ひいては、社会一般のレベルをあげることに。罪悪を未然に防ぐ。」

「予防の1オンスは治療の1ポンドに優る。」

「物、衣服に事欠いて、帰る家と言ってもただ雨露しのぐに過ぎず、両親は教育が無くて、全く放棄されたままの下層の人たちの子ども」

つまり、現代的に言うとするならば、予防の100円は治療の1万円にまさると。だからここにもっとお金をきちんと投入しようという文章を書いて「みんな協力してくれ」と訴えました。でも同時に野口幽香は華族貴族の幼稚園の仕事をしている。同じ子どもでどうしてこんなに違うのと、おかしいじゃないのと。でも重要なのは野口幽香が階級闘争史観に立たなかったことです。「持っている者たちから奪って、貧しい者達の為に使え」という考え方にはならず、「架け橋になりたい。虹になりたい」と。

華族・貴族・皇室も含めて、この貧困の淵の中にいて苦しんでいる子どもたちに協力してくれる人はすべて味方なんだという考え方をしました。これは現代でも参考になります。

私が二葉の人たちを見ていて思うのは、行政に対しては色々思うところあると思われます。しかし、行政に対して対決的なことは絶対にしない。それは行政との間でさまざまな見解の違いがある、予算の

制約があるのだけれども、そこで均衡点を見出していこう。行政の人たちは行政の立場で一生懸命子どもたちの幸せを考えているのだと。

子どもたちはその持っている資質・能力、変わらないですよ。環境の要素が極めて大きい。しかし、それはもう個人の力でも行政の力でも、そしてまた施設の力によっても完全に変えることはできない。しかし我々は微力かもしれないけども無力ではない。変えていく努力って凄く必要です。日本のあちこちにいる人たちが連帯していけば必ずこの社会は変わっていく。そう思います。

5 二葉の出発

～その原点にある可能性と発展性～

では、初期の二葉幼稚園はどんな感じだったのでしょうか。

貝出寿美子先生の資料から引用します。

「場所は酒屋の露路の一番奥で、八畳に六畳、二畳二間に庭十二坪の平屋建てで家賃は一ヶ月六円だった。広い部屋を遊戯室として、他の部屋は食事、二畳は小使室とした。この家は壮士の人々が合宿したところで、大変乱暴に住み荒らされ、柱は傾き壁は落ち、見るからに荒れ果てた家であったが無心に遊ぶ子どもらの垢じみた胸掛や、つぎはぎだらけの筒袖の子ども。その子らの背に羽の生えた玉のような神の使いがおとずれて、ここだけは冷たい世風の届かない春風の温かさが感じられる神の園だった。」

科目は遊戯、唱歌、談話、手芸で、華族幼稚園や普通幼稚園と一緒にです。ところがね、いたずら坊主が多いから、規則にはあまり縛り付けなくて、手芸とか唱歌は後回しにして、遊戯を主とする方針を



取った。それから全然無料では親たちに依頼心を起こさせるので、お礼として一日一銭を徴収した。この辺のところに「自立」という発想の原点があります。

専任保母の平野まちと子どもたちの間は、はじめは言葉もよく通じなかった。当時の東京でも住んでいる場所や出身階層で言葉が通じない。こうあります。「彼らは貧民階層のみに通じ合う粗野な言葉遣いであったものが段々先生を見習って、『あたい』『おいら』『てめえ』『おめえ』が、『あなた』『～さん』と変化した。」と。

写真を写しても、他人の顔は分かっても、自分の顔が分からない。おそらく家に鏡がないから。自分の顔を見たことない。それで「自分の顔はこれなんだよ」と教えてあげたそうです。

それから、お弁当の時間に先生が「何が一番おいしいのですか？」と訊くと生徒たちは大抵は「しゃけ、たら」と答える。鮭と鱈は当時の一番安いタンパク源です。それ以外食べたことがない。幼稚園に来て初めて様々なものを食べたわけです。

それからこういう質問。「幼稚園がおうちより、なぜ良いのですか？」という質問に対しては、「家にいると朝から晩まで叱られてばかりいるけれども、幼稚園では叱られない」それからね「幼稚園にいますと、お酒だとか、お味噌だとかを買いに行かないでもいい。幼稚園にいますと、おもちゃがたくさんある」と。

あと「あなたの名は何て言いますか？」と尋ねるでしょ。すると、「あなたの名は？」って質問に質問で書き返してくる。「どうも自分の正確な名前も知らぬようだった」とあります。

また、ある時「先生が来やがった」と言うんで、「『先生が来やがった』はいけないでしょ」って言うと、子どもが少し考えて「先生が来やがりました」と。こんなような感じで「使い慣れた言葉を徐々に日常の言葉にしていくのは大変な努力でした」ということが書いてあります。でもこれどうでしょう。今でもちょっと形は違うけども、日々現場で皆さんが苦勞していることじゃないでしょうか。

それからね、園外活動として、幽香先生が持っている貴族の友達がたくさんいる。そののところに一日里親で預ける。それで「違う生活があるんだよ」



麹町に二葉幼稚園設立

ということを知るようにと心掛けたわけです。だから里親制度の先駆け的なことも幽香先生はやられている。そうしたら野口幽香先生の歴史を学ぶだけで、まるで小宇宙のように、その後の保育・児童養護で出てくる問題の原点があると気づきます。

それからですね、家庭との連絡を密にする必要があるので家庭訪問もする。でも、あらかじめ訪問する時間を言うと親が準備してしまうので突然訪問した。それから病気の子どものケアの必要がある。その時には特に親との交際を密接にして、子どもの教育の大切さを伝えたそうです。

お金の管理も重要なテーマだったようです。働いた収入をすべて使ってしまう。つまり生活習慣弱者でもある。経済的弱者は情報弱者でもある。だから貧困のスパイラルに入ってしまう。「モラルで律しろ」と言っただけで駄目なのです。ですから、私はベーシックインカムみたいに「お金だけ渡して、あとは知りませんよ」というみたいな発想は好きではない。それよりも、「ベーシックサービス」の方がいいと思います。医療や、食べ物といった具体的なサービスを供給したほうがいいと思う。当時の二葉幼稚園の機能を見てるとすでにそれをやっていたのです。

それで保護者に、「貯蓄をして、今のこの貧民街の生活を脱した生活ができる可能性もあるよ」ということを一生懸命話す。親身になって話をしているうちに、中には反発する人もいたけれども、幽香と膝を乗り出して話し出すような人もいたということです。

そして就学年齢に達して、入学する者には今度はお金を補助して小学校に通えるようにして、小学校

とは連絡を密にする。それから特に病気の子どもの取り扱い、これに関しては当時の赤坂病院の院長のホイットニーさんと回生病院の木沢敏さんが非常に熱心だったんで手伝ってもらった。それらを見ていた看護師さんが「二葉で働きたい」と言って二葉に入ることもあったそうです。

ちなみに「二葉」っていう名前は華族女学院校長、兼高等師範幼稚園長の細川潤次郎の幼稚園保母唱歌の中の「二葉の撫子さかゆく園生」から選んだそうです。

6 皇后陛下への御進講

～皇室とキリスト教～

幽香 77 歳の時、戦時下の 1942 年の 4 月。皇后陛下に幽香が御進講をしています。それは 1942 年、昭和 17 年 4 月 17 日から始まっています。

幽香は「幸福な草庵の昼食時、光耀といった経験がありますか？」と皇后に問う。つづけて「私は二度あります。まだ学習院在職中の色々な煩悶の結果、摩耶山に籠ったのです。真剣に祈り続けました。大正 3 年 8 月 15 日。この日突然次のようなお言葉が与えられました。出エジプト記 3 章 10 節から 13 節でした。」

「されば来たれ我汝をパロにつかわし汝をしてわが民イスラエルの人々をエジプトより導き出さしめん。モーセ神にいひけるは、我は如何なるぞや。我あにパロのもとにゆき、イスラエルの子孫をエジプトより導き出すべきものならんや。」こういう風に言われたと。そして、「我必ず汝と共にあるべし」と。

「この時に私は貴族伝道をしないといけない。私は日本の華族にキリスト教を伝えないといけないと、そして実行したのですけども、やむなく事情のために中断した。そうじゃなかったら、私は宮中に入ってあなたに話さないといけないかったですと。この話は皇后に話さないといけないことだったので。」と幽香は皇后に伝えました。

「我必ず汝と共にあるべし」という言葉はキリスト教徒として実に強い。従わざるを得ない。

つづけて幽香は言いました。「今となってあの時

の御示しはこの事だったかと知るわけですが、実に 30 年の月日と試練の時、準備期があったのです。なまやさしい事ではありません。」

これは非常に興味深い。天皇皇后のところには情報が集まっているから、昭和 17 年の段階では日本の敗北は必至だということは宮中ではもう分かっていた。だからキリスト教について知らないといけなく、それも単にキリスト教の表面的なことじゃなくて、キリスト教徒を突き動かす根本の精神は何なのかと。それはあの時代においても、時局に迎合せず、貧しい子どもたちに私はキリスト教徒だからやるのですっていうことを言って、同時に日本の国をとて愛してる野口幽香。この人から聞けばキリスト教って何なの分かるだろうと、きっと皇室は思ったのですね。

7 野口幽香の精神

～受けるよりは与えるほうが幸いである～

だから、どんな状況においても、この野口幽香がイエス・キリストに従うというその原点は動かなかったわけです。それで私はこの野口幽香の生涯を見て感じるのが使徒言行録でパウロが紹介しているイエスの言葉です。パウロがこう言います。

「主イエスが御自身が『受けるよりは与えるほうが幸いである。』と言われた言葉を思い出すようにと私はいつも身をもって示してきました。」と。野口幽香も一生この精神を生きました。

野口幽香は自分の様々な学識、教育の経験。あるいは現在のお茶の水女子大学で学ぶような機会を得た。様々なネットワークを得た。その貫ったものを自分の実力で私はそこまで這い上がって来たっていう発想じゃなくて、神さまから頂いたものだから「神様に返さないといけない」と。しかし神様にダイレクトに返せますか？返せないから隣人に返す。目に見えるところにある人に。遠くの人じゃなくて。

8 締めくくり

～自分もひと大切にする事の大切さ～

あともう一つ。「無理をするな」ということです。

私は献身的な思いで児童福祉分野で一生懸命に仕

事をするがゆえに擦りきれちゃうような事例もいくつか見えています。大切なのは無私の奉仕じゃない。私自身を大切にすること。だから無理はしない。そして自分自身を大切に、自分自身の幸せも考えながら、具体的な見える隣人のために奉仕していく。

それから彼女にとって、やはり重要だったのは彼女がキリスト教を信じていた。イエス・キリストに従うということを知っていた。ただし、他の人は他の宗教を信じている。たとえば皇室だったら神道を信じている。それらをお互いに認め合うことが大切です。そういう寛容の精神と多元性。自分にとっては絶対に正しいことがある。それは譲れない。自分の人生を賭けて行くことだけれども、他の人には他の人のそういうものがあると。本当に自分の価値観に従って生きている人たちには「地下水脈」みたいなものがある、それが繋がっていくのではないかと、こういう考え方だったと思うのです。私は、現在の二葉乳児院、保育園、それから、トリノスに接してそう感じています。

教会の中でこんなことを言うのも不思議かもしれないけれど、キリスト教徒であるとか、宗教を信じているかどうかは本質的な問題じゃない。「受けるよりは与えるほうが幸いである。」自分の力を自分で溜

め込んで自分のためだけに使うっていうような発想ではなくて、他者のために使う。その方が自分が幸せだからだと。こういう価値観。社会に自分の力を還元する。そして、無理はせずに持続的に与えられた環境を少しずつ変えていく。

こういうことをできるような人。それを野口幽香は望んでいたし、その第一歩を120年前に彼女は標したのではないかと思うのです。そして、現代時代を経て、120年経った今日においてもこの場におられる方々の中に、それぞれの形でこの野口幽香の精神というものが継承されているのだと思います。

佐藤 優氏プロフィール

1960年生まれ。作家・元外務省主任分析官。同志社大学大学院神学研究科修了後、外務省入省。現在は、作家活動に取り組む。著書に、『国家の罣』『自壊する帝国』『いま生きる「資本論」』（新潮文庫）、『勉強法』（角川新書）、『資本主義の極意』（NHK出版新書）、『子どもを守る仕事』（遠藤久江、池上和子との共著、ちくまプリマー新書）など。



法人研修に来講いただいた佐藤先生を囲んで（2017年6月）

二葉乳児院における里親家庭支援と これからの「乳児院機能」の展望

二葉乳児院

① はじめに

二葉乳児院は、1948年（昭和23）の児童福祉法施行に伴って開設されている。現在でも、開設当初からの子どもの記録を保管しており、当時の乳児院での養育の様子が伺える。当院は、①入所施設、②地域子育て支援センター、③子どもと里親家庭支援を柱とし、「children first」を理念として運営している。今回の実践報告では、二葉乳児院の取り組みの柱の一つである里親家庭支援について述べながら、これからの「乳児院機能」についての考察と展望を述べたい。

② 二葉乳児院の里親支援のこれまで

保管されている設立当初の頃の記録の中には、養子縁組をするために引き取られていく子どもへのメッセージが記載されている。養育者の温かな視点を通しながら、子どもたちをどう次の生活の場へつないでいくかについて、丁寧な取り組みを開設当初から行っていることが伺える。

当時乳児院では、8割超が家庭復帰であり、里親家庭への委託はほとんど行われていなかった。しかしながら、数ケースであっても、家庭に帰ることが難しい子どもたちのパーマネンシー保障として、里親家庭を念頭に置きながら取り組みを進めている。昭和61年には、都内9番目となる養育家庭センターを設置し、唯一乳児院が運営する養育里親支援にかかわるセンター運営を行っている。その後、平成13年、養育家庭センターは、児童相談所へ業務が移行となり、その任を終えている。しかし、その時期に関わった里親家庭と子どもへの相談支援は継続して行われ、今でも様々な交流がある。それ以降も、複数の助成事業を利用しながら、里親子への研修や

交流企画を行っている。また、養育家庭センターワーカーであった職員3名が、アメリカ・コロラド州の里親研修のテキストを参考にした『里親家庭での「心理的親子関係」を作るには』を作成・発行している。

平成17年には、家庭的養護推進モデル事業を受託し、未委託家庭向けの研修やテキストの作成を中心とした相互交流・研修事業を担当した。その際に、「すくすく」「のびのび」という2冊の里親家庭向けテキストを作成している。

③ 里親支援機関事業の10年の取り組み

その後、平成20年度、厚生労働省が里親支援機関事業を開始した。これは、当時、行政主導であった里親家庭支援を、民間団体への委託可能とし、幅広い柔軟な支援と連携が可能とした。しかし、行政および児童相談所が行う支援を民間にどう委託し、連携すればいいかわからないという自治体も多く、事業開始当初は、全国的にも民間との連携を躊躇する様子が伺えた。

そういったなか、東京都も例外ではなかったが、「東京都里親支援機関事業モデル事業」として、民間団体への委託を決定する。これに伴い平成21年2月に、①里親委託等推進委員会の運営事務、②相互交流事業（研修や交流イベントの企



画・運営)、③養育体験、④里親制度普及啓発 等業務を受託し、里親委託等推進員1名を配置、東京都児童相談センター相談処遇課内にて事業を担当することとなった。平成23年には、都内3か所の児童相談所に対して、3つの事業者がそれぞれ1名ずつ職員を配置して事業を実施。平成24年には、都内11か所の児童相談所に、4つの事業者(二葉乳児院・一般社団法人東京臨床心理士会・NPO法人キアセット・NPO法人子ども福祉研究所)が分担して受託することとなる。二葉乳児院は、このうち4つの児童相談所(児童相談センター・北・江東・足立)を担当し、都内17区および島しょ地域を管轄としている。同年、乳児院および児童養護施設に里親支援専門相談員の配置が可能となり、里親支援にかかわる専門職員が増え、各関係機関職員と里親家庭との連携と情報共有の在り方が課題となり始める。

平成29年度後半より、東京都は「チーム養育」として、子どもと中心として、里親含む関係機関がチームとなって養育していくことを目的とした体制モデルを提示し、それぞれの業務内容を再整理して運営を開始している。里親支援機関事業の業務内容は、里親委託等推進委員会の運営事務、②相互交流事業(研修や交流イベントの企画・運営)、③養育体験、④里親制度普及啓発に加え、⑤相談支援事業、⑥未委託家庭支援、⑦一時保護委託時支援、⑧調査書および自立支援計画素案作成、⑨スキルアップ研修事業、⑩フォローアップ研修事業となり、里親家庭のリクルートから里親登録、未委託家庭支援、子どもとのマッチングから交流・委託後支援に至るまでの包括的な支援を事業のなかで見通すことが可能となった。

④ 二葉乳児院の里親家庭支援

平成24年より施設に配置が可能となった里親支援専門相談員は、①新規委託時フォローアップ、②定期巡回訪問、③学習ボランティア派遣調整、④育児家事援助者派遣、⑤広報啓発、⑥実習等受け入れ、⑦レスパイト等受け入れ など相談援助を中心とした養育支援を担当している。

里親支援専門相談員は、担当する児童相談所管内の里親家庭への支援を行っており、一方、里親交流



支援員は、自身の在籍する施設入所中の子どもに対して、里親養育を必要とする子どもの委託促進、および交流支援、アフターケアを中心とした業務を行っている。また、平成28年よりモデル事業を受託している特別養子縁組里親家庭を対象とした新生児委託事業にも担当者1名が配置されている。

二葉乳児院には、15名の里親支援専任の職員(児童相談所で業務を行う担当者8名含む)がそれぞれの役割を担って子どもと里親家庭への支援を行っている。15名の里親家庭支援専任職員が在籍する乳児院は全国的にみても珍しい。

それぞれが受託している事業内容や業務は異なるものの、「children first」の理念が中心にあることは変わらず、それによって、各業務を超えて連携することが可能になっている。

⑤ 二葉・子どもと里親サポートステーションの実践

二葉乳児院として様々な事業を展開しているが、まだまだ、実施されている事業だけでは、「子どもと里親さん、養子縁組成立後家庭を支える支援」に足りないところも多いと感じている。そのため、二葉乳児院は、平成29年、里親支援の充実とこれからの展開を視野に置いて、里親支援機関担当チームを「二葉・子どもと里親サポートステーション」と名づけている。サポートステーションでは、受託内容より幅広く、①里親家庭や他県含む里親支援に関わる機関からの相談や見学を受け入れ、②「子どもと里親研究会」(月1回)の実施、③『子どもと里親のためのサポートハンドブック』の作成、④フォスタリング機関等関係機関および里親家庭向けの研修講師、⑤大学・関係機関等への出前講座などを企

画している。

これらの活動は、「私たちの実践を周囲に伝えていく」という趣旨ではなく、どちらかと言えば、私たちが経験していた課題や子どもや里親家庭から教えてもらったことを整理し、発信することで、「これからの支援にどう結び付け、紡ぎだしていけるかを知るきっかけ」として捉えている。そのため、どの取り組みも継続し連続性を持たせるよう心掛け、一方向の企画ではなく、やりとりを大切にした仕組みとしている。

⑥ これからの「乳児院機能」の展望

平成29年8月に、厚生労働省・新たな社会的養育の在り方検討会より出された『新しい社会的養育ビジョン』を踏まえ、乳児院本体が、入所だけでなく、家庭復帰支援や地域の子育て支援拠点になること、そして、里親家庭・養子縁組成立後家庭への包括的な支援を組めるような体制強化が求められている。子どもやその家族のニーズに対して、どう施設を活かし、施設の強みを全ての家族の子育ての支えにしてもらえるかが問われていると言える。

二葉乳児院は、従来からの乳児院機能である子どもと実親への支援を丁寧に継続的に行うことで見えてきた様々な支援を、地域子育て支援や里親家庭への支援につなげている。これからも、本来ある乳児院の強みを伸ばし、ニーズをキャッチしながら、取り組む姿勢を大切にしていきたい。

助言者から

「育ちゆく二葉～二葉乳児院の働き、里親支援の取り組みとこれから」

青山学院女子短期大学教授 横堀 昌子

法人120周年のお祝いを心から申しあげたい。ニーズに応え「種」を蒔かれた野口先生たち。芽吹いた二葉に水をやり育ててこられた関係者の働き。それらすべてがこの国の児童福祉の歴史に意義深く刻まれ、「これから」に示唆を与えている。

筆者は、二葉・子どもと里親サポートステーショ

ンとして現在組織化されている里親家庭支援の事業のスーパーヴァイザーを2009年より務めてきた。また苦情解決・第三者委員として乳児院にかかわってきた者である。その中で得た学びは大きく、深い。

二葉乳児院は、“children first”の理念を掲げ、当事者視点で支援を発想する確かなまなごしをもって歩んでこられた。乳幼児の養育は、鈴木祐子前施設長の時代もそうであったが、幼い人たちの権利保障（親子分離した乳幼児の発達保障と家族支援）に徹底して心を注がれている。向き合うケースの多様性や難しさ、実践上の諸課題にも向き合いつつ、日常の養育を丁寧に積んできている。入所児の家庭支援も工夫と配慮を入れ込み、乳幼児の幸せのかたちと家族の可能性を模索してきた。一方里親養育を重んじ、「長期養育・個別養育は里親家庭に勝るものはない」とし、乳児院からの里親委託も積極的に推進してきた。

乳児院に入所した子どもの全記録を保管する取り組み、乳児院の2階に地域子育て支援センター二葉を併設し、地域の子育て家庭支援にも拠点型施設の機能を活かして取り組んできたことは意義深い。地域にひらいた相談支援、ひろば、ショートステイ事業による地域の家庭支援、英国発のホームスタートプログラムによるアウトリーチ型の家庭訪問。それらは、地域の家庭のニーズに沿い乳児院としてできることを実践化した取り組みである。

里親家庭支援は、前院長の時代に養育家庭センターを乳児院としては都内で1ヶ所、併設していた時代も定評があった。現在の組織は長田さんがまだ都内で1名の里親委託等推進員であった時代に始まる。早十年。チームは十名を超える大所帯となり、全国のモデルと言える専門性に裏打ちされた業務を展開するまでになった。二葉ならではの里親家庭支援や里親制度の推進にみる実践の確かさは、ニーズキャッチから具体的な支援を手がけようとするアセスメント力、よきリーダーに導かれたチーム力、里親支援機関として都から事業委託された事業のみならず、家庭養育や支援上の課題に対応して研修や講座、ハンドブック等を生み出した創造性にも表れている。微力ながら私はこの先も、子どもや実家族、里親家庭を支える働きの伴走者として歩みつつ、育ちゆく「二葉」を楽しみに見守りたい。

創立120周年記念実践報告会

二葉乳児院における 里親家庭支援とこれからの「乳児院機能」の展望

二葉乳児院
実践報告担当者: 長田 淳子
アドバイザー: 横堀 昌子先生
(青山学院女子短期大学教授)



2. 二葉乳児院の里親支援のこれまで



4. 10年の取り組みの中で大切にしてきたこと

- ・ 受託当初… 行政が担う里親支援にどのように協働することができるのか。
里親さんを知る。「二葉」ができることを考える。 **養親サロン、広報啓発**
- ・ 受託後2年目…相談援助事業の追加。 **カウンセリング、訪問支援**
乳児院職員であることの強みを活かせる企画運営。 **プレ子育て学習会**
- ・ 受託後5年(H24)…東京都支援機関事業全児童相談所配置。 **相談援助、研修企画**
質の担保。スタッフの増員。「里親支援機関事業」の強みを見つける。
施設配置の里親支援専門相談員との連携。 **養育体験 等**
- ・ 現在…里親支援職員の増加に伴う「チーム作り」の必要性。 **広報から相談までの包括支援**
里親さんと子どもにとって信頼できるパートナーとなるために。



6. 二葉・子どもと里親サポートステーションの実践①



- これからのフォスタリングの検討
関係機関関係職員との研究会の実施
⇒ 情報共有と連携を図り、
相互の強みを活かすあうために
- これまでのフォスタリングの検討
子どもと里親のためのサポートハンドブックの発行
⇒ これまでの課題を整理し、
次につなげる強みとするために

1. はじめに

- ・ 二葉乳児院の里親支援のこれまで
- ・ 里親支援機関事業の10年の取り組み
- ・ 二葉乳児院の里親支援
- ・ 二葉・子どもと里親サポートステーションの実践
- ・ これからの「乳児院機能」の展望



3. 里親支援機関事業の10年の取り組み



5. 二葉乳児院の里親支援



- 入所児童のこれからをつなぐ
- 記録と記憶を保存する
- つなぐ
子どもと里親家庭
子どもと子ども 里親と里親
- 家族の「つむぐ」を支える

7. 二葉・子どもと里親サポートステーションの実践②



- いまある支援の充実と発展
- ・ 子どもと里親家族の相談対応
- ・ 子どもと里親家族への交流事業の検討 子どもキャンプ、サロン
- ・ 施設や地域関係機関との連携
研究会や勉強会の開催
- ・ 子育て支援団体との協働
広報啓発、情報共有、連携

9. これからの「乳児院機能」の展望

- 「children first」
- 全ての子どもと家族を支える方略
- 地域にある(存在する)という意味
- 様々な専門性の活用
- 「子育て支援」の専門性
- 「家族支援」の専門性
- 「地域と関係機関と家族をつなぐ」専門性
- ➡ 専門性を活かした支援と展開



8. 新しい社会的養育ビジョン

平成29年8月2日



乳幼児の家庭養育原則の徹底と
年限を明確にした取組目標

- 全年齢層にわたる里親委託率向上に向けた取組【今から】
- 3歳未満：75%以上【概ね5年以内】
- 3歳以上・就学前：75%以上【概ね7年以内】
- 学童期以降：50%以上【概ね10年以内】

★乳児院のこれまでの取り組みと強みの整理と
多機能・高機能の強みを活かしたこれからの支援の検討



10. さいごに

ご清聴ありがとうございました。

この地に根付いた保育実践 古き二葉を訪ね、未来を描く

～ 二葉の歴史は「南元」が原点 ～

二葉南元保育園

① はじめに

二葉保育園は、1900（明治33）年に野口幽香と森島美根によって設立された。キリスト信者であった二人は、貧しく放置されている子どもたちを見ることができなかった。番町教会で出会った宣教師ミス・デントンの理解と協力を受け、慈善音楽会を開催し、その収益金で貧民のための二葉幼稚園を設立した。

それは新宿麴町の借家で子ども6人からの始まりであった。現在地に新築移転をして113年の歳月が流れているが、この間、幼稚園を保育園に、母子寮、小学部、乳児院等この地でさまざまな事業が展開してきた。二葉南元保育園は二葉保育園120年の保育の実践を継承している事業体として、これまで守り続けられてきたこと、大切にされてきたこと等を120年の歴史から4つの柱（建物、働き人、保育内容、行事）で考察してみたい。

② 建物と事業概要

- 1900（明治33）年1月 新宿麴町区下6番地27番地で園児6名、保母1名で二葉幼稚園が始まる。
8月麴町区土手3番地町へ移転。園児46名。
- 1906（明治39）年3月 鮫河橋移転。
園児120名、保母6名。
4月保育料廃止、終日保育とする。
- 1916（大正5）年 二葉保育園に名称変更。
園児265名。保母8名。
分園を内藤新宿南町（後の旭町）に開設。
- 1921（大正11）年6月 二葉保育園本園に「母の家」が付設された。10世帯を保護収容する。
- 1922（大正12）年9月 関東大震災の為、分園消失、

- 本園も大破損。
1945（昭和20）年4月 本園に強制疎開の命令がでる。
1週間後空襲で本園被災。
- 1950（昭和25）年3月 鮫河橋が南元町に改名。
総合的児童福祉施設の1階を保育園として使用。園児43名、乳児院15名、母の家10世帯。
設鉄筋コンセットハウスを建設。
- 1951（昭和26）年12月 児童福祉法により認可。
- 1965（昭和40）年 乳児院の改築に伴い、保育園の幼児棟は事業部の1階を保育室として使用。
- 1967（昭和42）年 東南の角に0歳児室が完成。
- 1969（昭和44）年12月 ホール兼3、4、5歳児混合クラスの部屋が幼児棟南側に増築される。
- 1978（昭和53）年 乳児院の洗濯場屋根の上に4、5歳児混合クラスの部屋が増築される。
- 1983（昭和58）年 全面改築。園児61名。
- 2014（平成26）年1 全面改築。
園児110名、職員52名。
- 2015（平成27）年4月 開所時間が7時～20時。
一時保育事業開始。

南元保育園の歩みは二葉保育園の全体の事業と深いつながりの中で展開していた。大正12年9月の関東大震災や昭和20年の東京大空襲で大きな被害にあったが、この地域での事業は継続されている。また、戦後の建物の老朽化により増築や改築を繰り返しながらも、常に子ども中心に考えた建物を工夫している。例えば、明治39年に2階建てを新築した際、各部屋の前に、幼児が直接外へ出られるように斜めの木板が取り付けられていた。その後の改築時も採光・風・子どもの動線・安全面を考慮した建物になっている。建物に関しては、時代のニーズ応える事業と、それを実現する建物をこの土地に建て

て、時には共有しながら事業が進められてきた。

③ 働き人

二葉幼稚園は、たった一人の保母から始まった。貧困家庭の子ども達を預かるだけではなく、養護と教育の面を合わせ持ち、感性豊かに、そして子ども達を清潔で健康かつ、子どもらしく育てたいという思いが保育内容や行事の中に見られる。これらを担った保母は保育以外にもさまざまな役割を持っていた。特に母親に対する生活指導をすることが子ども達をより良く育てることになると考え、父母の集会、家庭訪問、栄養指導、貯金の指導、さらに毎週土曜日に100人以上の子ども達を入浴させ、爪を切り耳垢まで取り綺麗にしてあげた。その時母親達も交代で手伝わせ、母親に入浴の方法を伝えることもした。

昭和25年、現在地に二葉南元保育園、乳児院、母子寮が建築された頃は、職員は3施設の区別なく働いており24時間の勤務体制であった。保母は母子寮と同じ部屋に住み込んでいたこともあり、夜勤明けでの休憩時間などは、保母が保育室の押入れて仮眠をとるといった時代もあった。休みも週1日の公休が取れないほどの過酷労働であった。報酬も少なく、厳しい労働にも関わらず、一人でも多くの子どもや親のためにという使命感で働いていた。また、保母達は保育の在り方についてよく話し合い、よりよい保育を目指して研鑽をつんでいた。震災、戦争、食料難など、さまざまな困難にも助け合って乗り越えてきたことが分かった。

現在の二葉南元保育園の52名の職員は、平均勤続年数が14年であり、比較的長く勤務している。長く働き続けているからこそ職員間の理解も深まり、いざという時に助け合うことが出来る職場になっている。二葉保育園の事業を継続していくためには、一人ひとりの力量を十分に発揮して、良き職員のチームワークをつくっていくことが重要である。子どもたちの未来を託されているものとして、希望と誇りをもって、二葉保育園の歴史の継承者として歩み続けていきたい。

④ 保育内容

開所当時の二葉幼稚園の保育内容は、他の幼稚園と変わらず遊戯、唱歌、談話及び手技であった。更に創設者2名はキリスト教徒であったので、宗教教育にも取り組んでいきたいとの思いがあった。園児は規則正しい生活や衛生観念が身に付いておらず、言葉遣いも悪かった。また生活体験が乏しく絵本を読み聞かせても登場する動物が分からなかった。こうした状況を考慮して動物園に行ったり園外に連れだしたりしてさまざまなことを経験させた。

鮫河橋移転後は、5クラスでの保育となった。幼稚園設置基準よりも手厚く保母1名に園児20名とし「家庭もなく躰もなき貧民の子どもに対しては尚更多数に致して保育者加減に致すよりは少数にしても充分にして見たいといふ希望から」この様になったと記されている。この頃は夏休みもなく終日保育であった。子どもたちの実態から、もはや幼稚園枠内の保育内容では子どもたちを守れないと考え、大正5年に二葉保育園と改め、救済事業となった。

戦後～昭和30年代は、地域の子どもの他に母子寮の子と、乳児院の幼児等を昼間一緒に保育していた。昭和27年の日誌によると讚美歌に始まり、お祈り、季節の歌、感覚遊び、リズム遊び等で午前中を過ごしたとの記述がある。昭和30年代後半は、乳児保育の充実を図ることを目標に0歳児・1歳児の保を進めることとなり、昭和43年に東京都産休明け0歳児モデル保育所の指定を受けた。

南元保育園が何を大切に保育してきたかを考えた時、貧困や生活の困難のゆえに放置されていた子どもたちを、親たちも含めて幸せな生涯を送ることができる力をつけたいと願っていたと思う。特に子どもの中にある育つ力を信じ、一人ひとりを大切に保育するために、少人数での保育を目指しての保育であった。時代は変化し、地域や家族の保育へのニーズも変化してきているが、日々の保育は保護者と協力しながら、子どもたちの健康と生きる力を育て、家族とともに子どもの育ちを喜びあっている。

⑤ 行事

行事とは『子どもを主体とし子どもにどんなことを経験させたいかの試み』である。子どもの時に体

験したさまざまな行事の思い出は、大人になっても記憶に残っていると卒園児は懐かしむ。

行事は時代を反映しているものと、長く続いているものがある。設立当時は動物園に行ったことのない貧しい子どもたちに動物を見せたい、お弁当を持って遠足を経験させたい等、保育園の行事で変わらないものもある。普段家庭では出来ない、特別な楽しい経験をすることが出来る。

設立翌年にはミス・ウエストン宅に招かれ、別世界に来たような、ろうそくやランプの明かりが灯ったクリスマスツリーを見せて頂いたり、寄付の古着や足袋をクリスマスに分けたり、米軍の兵隊さんにイースターパーティに招待されたり等、時代を反映した行事もある。

子ども達が友達と一緒に楽しんだり頑張ったりすることを通して、思いがけない子ども的一面を発見したり、行事を通して成長のきっかけにする子どもの姿を発見して、大きな喜びを感じることも多い。クリスマス祝会、運動会等時代と共に変わりなく続けられている行事も見直しながら継承されている。120年前からの保育園ならではの行事を後世へ繋げていくことも大きな役割である。

⑥ おわりに

二葉幼稚園の事業が始まり120年がたった。今回の実践研究で南元保育園そのものが二葉幼稚園の原点に立ち続けており、120年の歴史の所産であることがわかった。二葉幼稚園の事業は120年の間にさまざまに枝分かれして今日の社会福祉法人二葉保育園になっている。今私たちは、南元保育園の事業を担っているが、この120年間のさまざまな活動のルーツを改めて学ぶことができた。そこには創設者をはじめ、多くの先達の息遣いさえ感じられる。改めて、南元保育園には二葉の活動の素晴らしい財産がある事に気付かされ、これを大事に次世代に継承していきたいと決意を新たにしました。

* 保母の記述は現在の保育士

助言者から

(社福) 二葉保育園前理事長 遠藤久江

二葉南元保育園の皆様は二葉保育園120年の歴史が、今どのように二葉南元保育園に継承されているのかを知りたいと思いました。このテーマは120年の実践報告にふさわしいものではありませんが、大変な作業でもありました。大変さの一つは、南元保育園は120年同じところに立ち続けていますが、社会福祉法人二葉保育園はこの地から枝分かれして今の姿になっているので、二葉の事業の中から、二葉南元保育園の事業を抽出していくことが難しいと思いました。

二葉保育園は幼稚園から保育園となり、不就学児の為の小学部を付設、保育室を利用して放課後の子ども達の為の少年少女クラブ、有志の教師による卒園生の為の教育機関の日曜学校、母親達に古着類の寄付の中から着物を仕立て直させ収入を得る廉売部の事業、ボランティアの医師による薬代五銭の夜間診療部、安価で栄養の高い食事を提供する五銭食堂、母子寮等を通じて、底辺社会の人々の為に尽力した。このような事業を保育士たちが担ったのだろうか。時代が変わり、各事業は専門性を持った事業所として運営されるようになっていますが、地域のために、皆で話し合っって子どもとその家族を守っていこうとする南元保育園の姿勢はこの歴史から確かに受け継がれていると思います。

第2にどのような項目で120年の保育園の歴史を整理するかを考えることです。

実践研究の担当者4人の方とお話をしながら、建物と事業活動との関連、働き人、保育の内容、そして、保育園の行事、の4つの柱にしてまとめていくことになりました。

この項目なら、120年の歴史を学びながら、今へと繋げられるのではないかと考えたからです。作業は至難の業でした。分厚い「二葉保育園85年史」を読み込み、古い保育園の記録を段ボールの中から探し出し、古い職員に聞き取りをしました。

この研究をまとめながら、古い時代の先達の息遣いや苦悩する姿に触れる思いがしましたが、確実に今の保育園に続いているものを見出すこともできま

した。この地域とこの時代にしっかりと向き合って保育をすることが、二葉南元保育園として歴史を継承することであると思えることができました。

テーマがあまりにも大きいものでしたので、成果は十分とは言えませんが、この研究活動を通して、二葉南元保育園の職員は120年の二葉の歴史に誇りを持ち、歴史の継承者としての自覚を高めたことがなによりも貴重な機会であったと思います。

創立120周年記念実践報告会

**この地に根付いた保育実践
古き二葉を訪ね、未来を描く**

～二葉の歴史は「南元」が原点～

実践報告担当者
山崎 雅世 高橋 陽子 西山 葵 浦澤 康仁

アドバイザー
二葉保育園前理事長 遠藤 久江

二葉南元保育園

はじめに

◆ 明治33年1月10日創設
宣教師、ミス・デントンの理解と協力を受け、慈善音楽会を開催し、その収益金で貧民のための二葉幼稚園を、現在の学習院の幼稚園保母をしていた野口幽香、森島美根によって設立された。




森島美根 野口幽香

◆ 二人の思い
華族女学校では宗教教育が許されなかったこともあり、あの貧しい道端の子ども達を集めて、フレーベルの幼児教育を理想通りにやってみたいと思うようになった。

創設当初

創設時～明治年間における二葉幼稚園の位置図

- ① 明治33年1月 二葉幼稚園開園 園児6名、保母1名
- ② 明治33年8月 移転 園児46名
- ③ 明治35年4月 移転
- ④ 明治39年3月 鮫河橋移転 園児120、保母6名

JR 信濃町駅 JR 四ツ谷駅 JR 市ヶ谷駅

現在地 主婦会館 当時の番町教会

創設当初 ～建物～

第一期（創設時）麹町時代	第二期 麹町時代
私立二葉幼稚園 敷地34坪（112.2㎡）	私立二葉幼稚園 敷地92坪（303.6㎡）
麹町区下六番町二十七番地（明治33.1～明治33.8）	麹町区土手三番町七番地（明治33.8～明治35.5）
建物 平屋16坪（52.8㎡）	建物 平屋48.5坪（160.05㎡）

創設当初 ～働き人・保育内容・行事～

働き人

- 父母の集会、家庭訪問を実施。子どもの成長を通して親の成長を図り、喜びを提供する、優れた子育て支援の場
- 野口幽香が園内でキリスト教集会を始めた ⇒ 二葉独立教会 ⇒ 東中野教会

保育内容

- 保育内容は他の幼稚園と変わらず遊戯、歌、お話及び手先を使った遊び
- フレーベルの理念を基本として、子どもの自主性を尊重
- 規則正しい生活の獲得、経験を通して学ぶ

行事

- 子どもに楽しい体験をさせてあげたい ⇒ 人力車に乗って上野動物園へ
- クリスマス祝会も当初から開始、番町教会の牧師先生に来ていただいていた

戦後 ～建物～

南元町時代 二葉母の家南元寮
新宿区南元町四番地（昭和26年4月～昭和38年10月）

第七期の舎

2階平面図

1階平面図

第七期の式

2階平面図

1階平面図



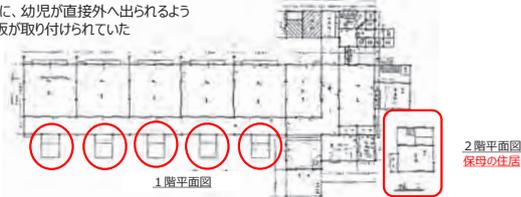
総合的児童福祉施設

鮫河橋移転後 ～建物～

鮫河橋御料地を無料拝受され、明治39年に2階建てを新築
増築部分は先帝御大葬場の建物を譲り受けられた物で造られた



各部屋の前に、幼児が直接外へ出られるように斜めの木板が取り付けられていた



2階平面図
保育の仕居

1階平面図

戦後 ～行事～



運動会
(昭和20年代)



クリスマス祝会
(昭和32年)

鮫河橋移転後 ～保育内容・働き人～

保育内容

- 設置基準では子ども40名に対し保育士1名の配置
本園は20名に対し保育士1名の配置。
少人数できめ細やかに子ども達を見ていきたい思い。
- 夏休みも無く終日保育となり幼稚園の枠組みを超えたもの



庭（砂場）であそぶ

働き人

- 母親に対する生活指導の必要性から、貯金指導、栄養指導、入浴指導等をした。
- 入浴は毎週土曜日に100人以上の子ども達を保育士が入れ、爪を切り耳垢まで取ってあげていた。
- 家庭生活改善の為に入浴介助の当番は母親達の交代制とし、保護者教育の場として活用。



入浴

戦後 ～働き人・保育内容～

働き人

- 3施設区別なく労働 24時間体制
- 報酬も少なく、休みがない
⇒ 目の前の子どもたちのため



昭和26年頃の集合写真

保育内容

- 地域の子どもと一緒に保育
- 讃美歌・お祈り・季節の歌・リズム遊びなどをしていた
- 乳児保育の充実に向け0・1歳児の保育



おやつ時間

昭和42年 東京都の産休明け0歳児モデル保育所の指定を受ける

二葉幼稚園から二葉保育園へ

西暦	事業概要・建物状況	児童状況
1900	明治33年1月 新宿麹町区下6番地27番地二葉幼稚園開園 8月 麹町区土手3番地町へ移転	園児6名、保育士1名 園児46名。
1906	明治39年3月 鮫河橋移転	園児120名、保育士6名
1916	大正5年 二葉保育園に名称変更 分園を内藤新宿南町（後の旭町）に開設	園児265名、保育士8名
1921	大正11年6月 二葉保育園本園に「母の家」が付設	10世帯を保護者収容
1922	大正12年9月 関東大震災の為、分園消失、本園も大破損	
1945	昭和20年4月 本園に強制疎開の命令がでる 1週間後空襲で本園被災	
1950	昭和25年3月 鮫河橋が南元町に改名。総合的児童福祉施設	園児43名、乳児院15名、母の家10世帯
1984	昭和59年4月 全面改築 法人も同建物内に設置	園児61名、職員20名
2014	平成26年10月 全面改築	園児110名、一時保育10名、職員52名

全面改築

第八期の舎 南元町時代 二葉南元保育園・法人本部
(昭和59年4月～現在)



法人本部

2階平面図

1階平面図



昭和59年 定数61名 職員20名

全面改築後 ～行事・働き人・保育内容～



二葉の車で芋ほり遠足 節分 キャンドルサービス クリスマス降誕劇

働き人

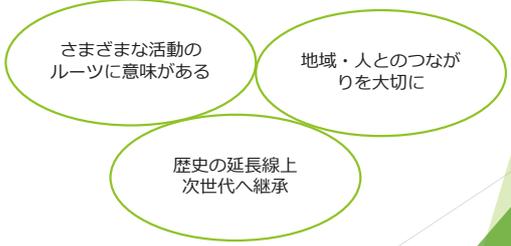
- 土曜日の週休2日制
- 産休・育休を取得後職場復帰
- 職員の時短勤務導入

保育内容

- 少人数保育の継承
- 4・5歳児の混合保育
- 料理保育・栽培保育
- 季節を感じられる取り組み（節分・お月見など）

～ おわりに ～

南元保育園は二葉幼稚園の原点
120年の歴史の所産



さまざまな活動の
ルーツに意味がある

地域・人とのつながり
を大切に

歴史の延長線上
次世代へ継承

再び全面改築 ～建物・働き人・保育内容・行事～

- 乳児の少人数保育ができる保育室の工夫
- 大・小2つのホール
- 専用型一時保育室開設
- 屋上にプール常設・ソーラーパネル設置・菜園花壇



働き人

- 職員52名 平均勤続年数 14年
- 栄養士・看護師・臨床心理士等専門職の配置
- 働き方改革をすすめる

保育内容

- 定数110名 一時保育10名
- 7:00～20:00 2時間延長保育
- 乳児クラスはユニットを分けて少人数保育
- 幼児クラスは、異年齢交流保育の実施

行事

- 子ども主体の行事
- 年齢・クラスにあった行事の計画

年長児作品



～ご清聴ありがとうございました～

小規模化・地域分散化児童養護施設の実践、 そしてこれからの二葉学園

二葉学園

① はじめに

二葉学園（以下、学園）はグループホームを全国でも先駆けて設置し、現在8カ所を展開している。ここまでに至る学園のあゆみ、その実践の成果を紹介していきたい。さらに、抱えてきた課題への取り組みと、今後の学園が目指していくビジョンについて、「二葉学園中長期計画」を中心に紹介していく。

② 小規模化・地域分散化へのあゆみ

(1) グループホーム実践の始まり

昭和53年当時、入所している子どもに対し、家族関係調整を推進する流れがあった。一方で家庭交流が望めず、施設生活の長期化が見込まれる子どもがおり、その支援について職員会議で論議を重ねていた。その中で、子どもにとっての最善の利益のためには、「その子どもの状況に応じた生活環境と養育方法が必要」という基本的方向性を定め、本園では家庭復帰を目標とした短期養護を、グループホームでは長期一貫性養護を展開していくことに決定した。当時の園長村岡先生が東京都に働きかけ、昭和56年に中山先生による「夫婦スタッフ・完全住み込み体制」のグループホームを開設する流れとなった。この翌年からの3年間を東京都は試行期間とし、昭和60年より制度化された。2番目のグループホームである奥野先生の「夫婦制グループホーム」は、当時東京都が要養護児童増加に苦慮し、学園にグループホームの開設を打診してきたところを受け、昭和61年に開設した。

(2) 本園の小規模化への移行と地域分散化

本園は、平成4年に大舎制から小規模化するために大規模改修をした。ユニット化した少人数単位での生活は子どもに気持ちの安定を与え、ルールも生活する子どもと職員で決めることができ、それぞれの個性が尊重された実感を持てる重要な要素だった。

グループホームは、第三分園～第六分園を平成16年から毎年一件ずつのペースで調布市・府中市に開設した。その背景には、平成14年に「地域小規模型グループホーム（国型）」が整備されたと同時に、多くの子ども達から「自分もグループホームで生活がしたい」という希望に応える意図が大きかった。この頃から被虐待の影響や、発達障がいを持つ子どもの入所が増え、支援体制の構築が求められてきた。さらに、園全体の運営としてグループホームを二つの市にまたがって広範囲に点在している影響と、小規模化・地域分散化の形態による様々な課題も見えてきた。

近年でもグループホームを推進し、要保護児童を一人でも多く受け入れるべく、平成29年に第七分園、平成31年に第八分園をそれぞれ開設している。

③ 小規模化・地域分散化のねらいと成果

グループホームは、子ども達の養育環境としての狙いである「個別化」「当たり前の生活」に繋がった。子どもは生活の中で、家事や当たり前の暮らし方を感じられるようになった。例えば、目の前で職員が調理する姿を見ることで、食を通じた関わりが豊かに持てるようになった。また、「我が家」という意識で生活を送ることができ、自分のことは自分です

る、自分で考えて一日を過ごすことは、これまで日課中心の生活だった子どもたちには大きな変化であった。さらに、近所とのコミュニケーションを築くと同時にそれを学べるなど、子どもにとって自立への力が日常生活の中で自然と育まれるようになっていった。

④ 小規模化・地域分散化の具体的課題について

学園がこれまで先駆的に小規模化・地域分散化を取り組み推進してきた中で、子どもの最善の利益の追求に併せて、その実践を支える職員体制や環境の改善に取り組むことが求められた。

(1) 閉鎖性

グループホームの状況は周囲に伝わりにくく、それによって閉鎖的あるいは独善的な関わりになるリスクを常に抱えていた。それが要因となって職員間や子どもとの関係でのトラブルが発生し、さらにその発見に遅れが生じてしまうことがあった。

(2) 新任職員の育成と孤立感

新任職員も早々にグループホーム担当として配置した職員体制であった。しかし、基本的には1人勤務の労働形態で、先輩職員と同様に家事と課題を抱えた子どもの対応、対外的な連絡等多様な役割や業務を求められた。

(3) 職員の負担・心労

子どもと深く関わるのがやりがいに繋がる一方、職員の心労と負担につながりやすかった。さらに宿直が月10回程度と超過勤務も常態化していた。

(4) 子どもの気持ちの表出

小集団での養護では、子どもは気持ちを出しやすいが、トラブルも起こりやすかった。それが狭い空間では影響力が大きく、問題は深刻化していた。また、同じような課題傾向がある子どもがいる場合は、自傷行為や逸脱行動などに広まってしまった。

(5) 本園とグループホームの距離

グループホームは調布・府中の2市にまたがり広域に点在している。遠いホームだと往復1時間かかる。この状況では緊急時の応援に時間を要し、その距離が職員の孤立感を増幅させていた。本園への送迎対応が常に必要なため職員の負担になっている。

⑤ 具体的課題への取り組みとその成果

これらの課題に対し、試行錯誤を繰り返しながら「風通しの良さ」「専門性の向上」「連携」「情報共有」等の視点から具体的な取り組みにつなげ、子どもの養護環境の整備として現在の形に至っている。

(1) 毎週の職員会議の実施

職員は日常的にはグループホームへ勤務するため、職員会議で顔を合わせる機会を作り、意図的にコミュニケーションの活性化につなげている。

(2) 事業計画書に立ち返ること

職員数が増え、それぞれが様々な価値観をもっている中、何に共通して立ち返るのが重要になってきた。そこで理念の大切さを再認識し、その具体化である事業計画書を携帯、活用することを標準化した。

(3) ホーム会議への専門職・主任の参加

ホーム会議に意図的に専門職がいずれかが必ず参加している。それにより多角的な視点での話し合いと、支援の透明性を保ち、職員間の「風通しの良さ」に繋がっている。

(4) 情報ネットワークの構築

子どもやホームの状況を学園全体で共有していくために情報のネットワークシステムを構築した。点在しているホームから子どもの記録や会議資料を閲覧できるようになった。そのため、情報の共有が容易になり迅速な対応にも繋がっている。

(5) 地域分散化における養護体制の土台作り

これまで取り組んできた週1泊程度の代泊アルバイト及び家事援助職員の配置は、職員の勤務軽減や休暇の確保に繋がっている。また各グループホームに3名の常勤職員、2ホームに1名のフリー職員、10箇所のホームに対して3名の養護主任の職員体制を整えた。これにより丁寧なホームへの支援、有事の際の早期対応、職員の育成が可能となった。この体制の維持が子ども達のニーズに関わる土台であると考えている。

(6) 専門職や医療との連携

様々な課題を抱えた子どもに対し、心理・医療との連携は欠かせない。心理士、治療指導員、児童精神科医師などが一堂に会し、関係する職員も加わり

「ミニカンファ」を実施している。これを速やかに開ける体制を整備したことで、多角的な視点から見た対応ができ、担当職員の負担を軽減することが出来ている。

6 これからの二葉学園

平成 29 年職員全体で学園の中長期計画を策定した。

方向性としては、大きく 2 つのことを挙げた。1 つ目が「ハード・ソフトの両面から養護の質を上げ、さまざまなニーズに対応できる施設をつくる」ということ、2 つ目は「持っている専門性や機能を活かし、新たに地域支援事業・里親支援事業に取り組むこと」である。この 2 つの取り組みを中心に長期・中期・短期目標を定め取り組んでいる段階にある。代表的な取り組みは、事業計画書の見直し、定員の変更、本園機能の検討、研修体系の検討、人材確保対策、インターンの導入、短時間正社員の検討、休暇取得推進、超過勤務を減らす取り組み、地域・里親支援の検討、ホームの地域への参画、学園の養護のまとめの冊子作成などを行っている。そして委員会や係に取り組むことを振り分け、そこが中心となって行う形をとっている。今はその五カ年計画の二年目になる。

7 おわりに

これから学園が目指すものについて、中長期計画を中心に取り組んでいるが、日頃の業務も抱えながらの中では思うように進まない事柄もたくさんある。さらに、実現する上では人材も予算もまだまだ足りない状況もある。しかし、それでも子どもの権利を護り、地域の子育て支援への対応ができる、する事業所を目指す上で、自分たちが何をを目指すのか、その方向を職員全体で作りに上げてきた。そこに向けて、今できることは何か常に考え、情勢の変化を捉えつつ、一步一步取り組み、強化・発展させ、様々な養護ニーズに応えながら、「総合的な子育て支援施設」として、地域や地域の里親のニーズにも応えられるような施設を目指していきたいと考えている。

助言者から

二葉学園の実践の評価と今後への期待

大正大学人間学部社会福祉学科教授 高橋 一弘

二葉学園の社会的養護実践の大きな特色は、今回の実践報告に示された通り、全国に先駆けて小規模化・地域分散化を進めてきた点にある。

昭和 56 (1981) 年に開設された第一分園は職員夫妻による家庭的養育であり、現在のファミリーホームに近い養育の試みであった。加えて短期養護は本園で、長期養護は分園でと、子どもの養護ニーズに沿って養育環境を分けようと試みたことも先駆性の高い実践である。家庭支援専門相談員もおかれていない時代に、学園が積極的に入所児童の家庭調整を行い、そのアセスメントに基づき小規模化・地域分園化を進めようとしたということが出来る。このような学園の実践が、都型グループホームのモデル事業となり、その後の本格実施につながった点も忘れてはならない。

それ以来、学園は平成 31 (2019) 年の第八分園の開設まで、38 年間にわたり八つのグループホームを開設し地域分散化を進めてきた。加えて本園も大舎制から小舎制へ改築するとともに、平成 24 (2012) 年には、小規模ユニット 2 ホームと心理室や家族交流室を複数配置するなどの建て替えを行い、小規模化と多機能化をさらに推進してきている。学園が進めてきたこのような小規模化・地域分散化は、一方で様々な課題解決の道りでもあった。実践報告ではこの課題が、「グループホームの閉鎖性」や「新任職員の孤立と育成」等の 5 点にまとめられている。そしてこの課題に対し試行錯誤しながら見出した解決策も 6 点にまとめられ示されている。国レベルで見れば児童養護施設の少規模化・地域分散化はようやく始まったばかりである。学園の実践に裏打ちされたこのような解決策は、今後多くの施設が直面する課題の解決に多くの示唆を与えることになるだろう。

今後への期待については、中長期計画を基に示された「地域支援」と「里親支援」について若干の私

見を述べておく。学園理解の浅薄さがあるかもしれないがご容赦願いたい。

まず地域支援については、コミュニティソーシャルワークをさらに意識した取り組みを期待したい。地域のために学園の機能を地域に活かす視点は計画の中に多く示されている。一方で、地域とともに子どもたちの養育と自立支援を行う視点を再度吟味するとよいと思う。これまでの学園の実践を再点検すれば、地域にある多くの社会資源に支えられてきたことに気づくことだろう。例えば学園や子どもたちにとっても理解のある不動産屋さんや大家さん、近隣住民や地元企業にボランティア等。この他にも公的機関である学校や子ども家庭支援センター等もある。コミュニティで支えあう関係づくりを広げていくことが地域支援である。これら社会資源の可視化と共有化を職員間で図り、地域における相互支援のネットワークづくりを意識できると、学園の地域支援はまたぐっと厚みを増すのではないだろうか。

里親支援については、学園の専門性を活かした支援を期待する。小規模化・地域分散化を進めてきた学園は里親との垣根が大変低い施設である。第一分園の開設時の姿は現代のファミリーホームである。学園が一つのグループホームのように近隣のファミリーホームと繋がり「ミニカンファ」をしてみるといのは如何だろう。地域の里親もケアニーズの高い里子の養育に悩んでいる。こんな里親との交流が生まれれば学園も里親の支援ニーズがよくわかるし、一方で彼らの家庭養育から学ぶこともあるだろう。里親支援に必要な知識と技術は二葉乳児院に多くの蓄積があるのでそこから学べばよい。法人各施設が蓄積してきた実践の英知を相互に活かしようときは、今である。

創立120周年記念 実践報告会

小規模化・地域分散化児童養護施設の実践 そしてこれからの二葉学園

報告者
松井夏子 星直倫 赤瀬正樹

アドバイザー
大正大学 教授 高橋一弘



はじめに

■本園とグループホームの位置関係



半径1.5 km

二葉学園グループホームの歩み①

S53年 二葉学園のGH構想検討の開始
 <基本的方向性>
 「その子どもの状況に応じた生活環境と養育方法が必要！」
 <具体的には...>
 本園→家庭復帰を目標とした短期養護
 グループホーム→長期一貫性養護

S56年「中山ホーム」開設 ※後の第一分園
 S60年 施設分園型グループホーム(都)制度化
 S61年「奥野ホーム」開設 ※後の第二分園



二葉学園グループホームの歩み③

H4年 本園を大規模改修(大舎从小舎へ)
 <小規模、家庭的な空間の良さ>
 生活時間もルールも生活する子どもと職員とで決める。
 それぞれの意見が反映され、個性が尊重された実感を持てる。
 安心感、気持ちの安定に繋がった。

H19年「専門機能強化型児童養護施設制度」施行
 →被虐待の影響や発達障害を持つ子どもへの支援体制強化が目的。
 学園も同年に指定を受け、精神科医と治療指導員を増員して対応に当たった。

二葉学園グループホームの歩み②



H16年 第三分園 (すみれ)
H19年 第六分園 (菜の花)



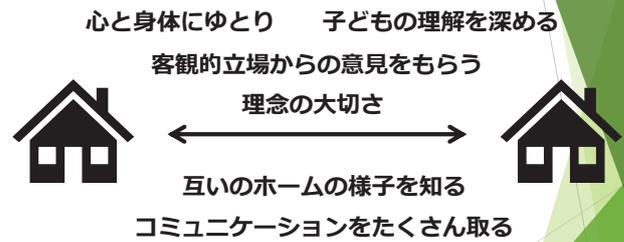
H17年 第四分園 (アスター)
H29年 第七分園 (あじさい)



H18年 第五分園 (けやき)
H31年 第八分園 (さくら)



課題への取り組みの中で大切にしたこと



小規模化・地域分散化のねらいと効果

「個別化」 「当たり前の生活」 「我が家」

- 自分のことは自分でする
- 自分で考えて一日を過ごす
- 目の前で調理をする
- 近所とのコミュニケーション など



日常生活の中で
自然と自立の力が育まれていった

課題への取り組みと成果

- 🏠 毎週の職員会議を実施
- 🏠 事業計画書に立ち返ること
- 🏠 ホーム会議への専門職・主任の参加
- 🏠 情報のネットワーク構築
- 🏠 地域分散化における養護体制の土台作り
- 🏠 専門職や医療との連携

小規模化・地域分散化の課題

- ◇ **閉鎖性** 閉鎖的あるいは独善的な関わり
トラブルの発見が遅れる
- ◇ **新任職員の育成・孤立感** 多様な役割と業務
先輩職員と同様の業務
- ◇ **職員の負担・心労** 月10回以上の宿直
超勤の常態化とバーンアウト
- ◇ **子どもの気持ちの表出** 問題の深刻化
職員が巻き込まれる
- ◇ **本園との距離** 車で往復1時間⇒孤立感の増幅
常に送迎体制が必要⇒職員の負担

これからの二葉学園

二葉学園中長期計画（平成29年検討・平成30年度から実施）

子どもの権利を護り、地域の子育て支援への対応ができる事業所を目指す。また、その事業を展開していく上で必要な人材を確保・育成していく。

- ハード・ソフト両面から養護の質を上げていく
- 新たな地域支援事業、里親支援事業に取り組んでいくこと

⇒ 総合的な子育て支援施設へ

小規模化・地域分散化の課題

- ▶ 風通しの良さ
- ▶ 専門性の向上
- ▶ 連携
- ▶ 情報共有



くすのきのもとに育つ子どもたち

二葉くすのき保育園

① 二葉旭町保育園～二葉くすのき保育園へ

二葉くすのき保育園の前身は、幸い戦禍にもあわず焼け残った新宿旭町の二葉保育園で、昭和23年12月29日に認可を受けた。

二代目徳永恕園長は、明治、大正、昭和にわたり、19歳から85歳まで、社会事業、保育事業に尽くし、生涯を貧しい人々の救済に捧げた。多くの恵まれない人々から「母」と慕われ、常々「世の中は一人の幸福でなしに全体の幸福でありたい。そういう意味で、本当に信じあえる平和な社会を作りだしたい。そのためには、一人一人が真実の生活を通して助け合っていかなければならない」と言われていた。

昭和44年に隣接の大同ビルが建設され、旭町保育園は一層ビルの谷間の保育園となり太陽を求めて野外保育に出かける回数も増えた。建物の中でも使用室を変更するなど最大限の努力をしたが木造園舎は、年々の補修費が嵩むばかりであったことや、徳永園長が昭和48年1月11日永眠されたこと、また前々から太陽のいっぱい入る代替地を望んでいたことなどが新宿旭町の地を去る契機の一つとなった。ちょうど調布市国領町に都営調布くすのき団地が出来るとあって保育園計画があり、大正5年来の歴史をもつ保育園の地を売却し、そのあと意志を引き継がれた堀越信子園長と旭町保育園の職員で移転計画を進めることとなった。

② 子どもの育ちと環境づくり

現在の二葉くすのき保育園は旭町時代の職員達が「子どもたちにとって」を第一に考え設計されている。背の小さい子どもには輻射熱で足元から温める

ことを大切にするという観点からその当時では珍しい床暖房が設置された。またホールを作らない分、保育室を広くした。子どもたちが様々な遊びができるようコーナー作りが出来る空間にした。0歳児クラスでは「受け入れ室」という空間を広くとった。保護者が送迎時に授乳をしたり身支度をゆっくり出来るように、また、大きい人と空間を分け感染症等の広がりや予防する意味での隔離空間としても保障された。「受け入れ室」はどの部屋にも設置している。園庭は新宿から移転する際「子どもの外遊びの空間」を考えた時に、乳児、幼児の身体の発達や動きを考慮して園庭を設計した。その結果、乳児庭・幼児庭を区切りそれぞれの外遊びの時間・空間を保障できるようにしたこと、砂場での遊びがじっくりできるように3ヶ所作ったこと、乳児庭には歩行の安定を促すために築山を作ったこと、各保育室の前には芝生を植え、土ぼこりが直接室内に入らないようにしたこと、幼児庭には子どもたちと一緒に野菜を育てる畑を作ったことなど、子どもの成長、発達に見合った空間づくりをした。

現在は園庭にあるたくさんの樹木や草花は子どもたちの遊びの対象になっていて、摘んだり木の枝をくぐったり、登ったり隠れたり、自然物を使って遊べる庭となっている。『一年を通じて子どもたちが園庭でたくさんの自然と触れ合えるように、そして子どもたちの遊びが豊かになるように』と、平成19年からグリーンアドバイザーのメンバーと職員と一緒に作業をしながら園庭造りをしている。

花壇には四季折々の花を植え季節の移り変わりを感じることが出来るようにして畑には旬の野菜を植えている。また小さな虫や鳥などとの交流が出来るという環境もとても良いところである。

③ ひとりひとりの人格を尊重する 保育

保育園は子どもにとって家庭よりはるかに大きな集団であり、家族構成・家庭環境、そこでの体験すべてが異なる子どもたちが生活する場である。

保育園で過ごす時間は長く、特に小さい子どもは保育園の環境を受け入れ安定して過ごせるようになるまでには時間がかかる。乳児クラスは特定の大人との強い結びつきを特に重視して、育児担当制をとっている。入園後、担当保育士を養育者に代わる一番身近な大人として保育園での一歩が始まる。

集団の中でひとりひとりの違いを認め、特定の大人が個を尊重しながら愛情を持って育児することで、愛着関係が生まれ、子どもは安心して育児を委ね参加するようになる。乳児期はひとつひとつの生活習慣をその子なりに身につけていく時期である。生活の流れは次への状況をいつも同じようにつくっていくことで、子どもたちを待たせず、せかせず、大人はひとりひとりその子らしいやり方を助けていくことができる。次に何をするのか見通しがもてるようになり、それはやがて個々の行為へ自身で参加していく姿につながっていく。

二葉くすのき保育園では、平成9年度より年齢別保育から3・4・5歳児の異年齢混合保育を実施している。時代とともに核家族や少子化が進む中で、子どもたちが少しずつ変わってきている（自己コントロールが出来ない、些細なことが原因でトラブルが発生しやすい、友だちと上手くかかわれないなど）ことを課題視し、約3年の準備期間を経て実施に踏み切った。異年齢混合保育の中では年齢、性別、発達・発育の違う子どもたちが3年間同じクラスで過ごすことになる。（卒園・進級で一年ごとにメンバーは変わる）その中でさまざまな人間関係が生まれ、個人のふるまいや態度が育っていくとともに、その子の位置も少しずつ変化していく。それはその子の情緒面を豊かに、そして自信に繋がっていく。家族とは違う集団の中で、自分を知り、受け入れることができるようになると、自分の出来ないことを他人に助けをもらう、自分も他人を助けるという関係が自然に生まれてくる。この中で、子どもたちの自己評価と自己像の形成が促され、社会性が育っていく。

④ 「わらべうた」で育つ子どもたち

現代の子どもたちの日常生活には、音楽があふれすぎていると言っても過言ではない。テレビ等で覚えた難かしい歌もよくうたっているが、音程やリズムが難しく、子どもたちにふさわしいとは言えない。子どもの情緒が豊かに安定して育つ為に「音楽」は必要不可欠なものであると同時に、子どもの知的発達、身体・運動機能の発達、社会性の発達など、発達全ての面に大きな影響力を持っている。

二葉くすのき保育園では、旭町時代の昭和46年より「わらべうた」を音楽として取り入れている。かつて、三世同居が普通だった頃には、祖母から、そして母から、わらべうたは歌いつがれてきた。愛情をも持って歌われる素朴な歌やあやし言葉は乳幼児にとっては、何ものにも替えがたい貴重なものである。日本の民謡やわらべうたは、世界でも珍しい特徴がある。一つはものすごく音程の幅が狭いこと。そしてもう一つはわらべうたの数がとても多いということ。日本のわらべうたは「レ・ド」という二つの音が基礎になって出来ている。この「レ・ド」という二度の音を中心としたわらべうたの節（ふし）というのは世界でも珍しい。古いものほど旋律に半音進行がみられないといわれているが、子どもたちがわらべうたの中でも半音のないもの、少ないものからうたっていくことによって、子どもの聴力感により確実に、より敏感に発達させることが出来る。乳児期の子どもにとってわらべうたは「うたうように話し、話すようにうたう」ものであり、大人の表情や身体の動きも一種の“ことば”“お話”“信号”でもある。幼児期は「音楽が好きになる」ことを目的とし、リズム感や聴感など音楽的能力を発達させる為に「課業」を行ないその中で運動・言語・ルール感・対人関係など幼児期の基本的な発達を促せるよう計画している。わらべうたは地域交流の場でも大変好評である。

⑤ 子どもたちに安全で望ましい食事を提供する

保育と給食は深く結びついている。食事は子ども

にとって一番の関心ごとである。

乳幼児期は色々な食材や調理法を繰り返し経験していくことで食材の味を覚え、その後の嗜好形成に大きな影響を与える大切な時期である。

保育園には生後57日目の子どもから6歳の子どもまで幅広い月齢の子どもが通うことができる。この変化の大きい6年間を保育者+給食室で一つの役割を補い合っている。子どもは消化機能が未発達であり、これから細胞の数を増やしていく時期である。小さな子ども達が口にする食べ物だからこそ、地産地消、国産を使用するなど「出所のはっきりした食材を使う事」が大切であり、子どもたちの「食品を選択する力」を養う意味でも保育園では安全なものを選択する責任がある。二葉くすのき保育園では「子ども達に、安全で望ましい食事を」をモットーに、開園当初から「食の安全」を心がけた食材で給食を提供している。

また、当園では離乳食は初期・中期・後期・完了期の4段階で個々のペースに応じて進めている。乳児期は1日の食事を4回食と考え保育園では午前食と午後食と2回の食事を摂っている。その後1回の食事とおやつに移行する。食事の内容が変化していくと同時に食器や食具も少しずつ変化し発達に合ったものを提供している。幼児クラスでは「課業」の中で「野菜について」「お米について」「魚・肉について」を主なテーマにして体験学習を実践している。5歳児は毎年、庭の畑に田んぼをつくり、お米作りをする。収穫・脱穀も自分たちで行い、おにぎりを握って食し楽しんでいる。体験と通じた学習では、収穫までの振り返りから始まり、お米の観察、食べ比べ、ネバネバ実験、「玄米」「胚芽米」「精白米」の違い、「うるち米」と「もち米」の違い、様々な発見ができる。「みて・さわって・においを感じて・味わって」を実体験できる事は大変貴重なことである。

「食」については保護者の関心も高くサンプル給食をめぐって親子の楽しいやりとりがきかれる。

たくさん時間と人のおかげで美味しいご飯が食べられていることを学び、「いただきます」と感謝の気持ちを込めて言えるように、食育活動を実施している。

助言者から

歴史の学びとともに

前二葉くすのき保育園園長 八木澤真理子

「くすのきのもとに育つ子どもたち」は、二葉くすのき保育園の保育が何を大切に、どのような保育を目指していくのかを簡潔に文章にまとめたものです。二葉くすのき保育園の前身の二葉旭町保育園時代の保育実践からの学びとともに、二葉くすのき保育園での40年以上積み上げてきた保育について、これからも職員一人一人の実践を、大事につなげていくために文章にまとめる作業に取り組みました。作成に力を尽くしてきた委員の方々の努力に思いをはせ、これからの未来に二葉くすのき保育園の保育の実践が日々紡がれていくことを願っています。

歴史をひもとく中で、以下の文章に行き当たりました。

「4月1日新年度には、各クラスの保母が創意を凝らして室作りをした。しかしお互いの保育の関連が薄く、保母により放任と規制の両極端を何年かごとに繰り返す状態となっていた。そんな時期、労働時間も受け持ち人数もグーンと減ってきたにもかかわらず、かえって仕事がしんどい、やりきれないという声が保母の中ででてきた。どうしてなのか？私たちはムダと思われるほど沢山の時間をかけて話し合った。そしてようやく単純ではあるが『よくあそぶ子は、よくたべ、よくねむる』といったことで、共通の意識に至ることができた。」

「思いつき仕事からぬけ出し、保育に見通しを持ち、教育を計画的仕事として組織していこうと努力し始めた。クラスを自分の個人の仕事としてしよこみ、悩むのではなく、組織的な仕事の一環として保母集団の積み重なった実践や討論の上に立って、安定した気持ちで保育に当たれるようになりつつある。困った点についても、いつもみんなの仕事の一部としていくこと。そのための共通基盤として、育児・集団教育・あそび・課業・環境整備・親との連携・行事・職員の働き方の八項にわけて考えている。」

「未来の社会に子どもたちを送り出す私たち教育

者は、未来の社会に影響を及ぼす現在の社会を少しでも良くする責任を怠ってはならない。時には落ち着いた保育に専心できないと思うほど、こうした社会的問題や運動にとられることがあっても、嘆いてはならないと思う。なぜならそれが『保育内容はもう結構です。今世の中で困っている人を締め出すことはできないんです!』と言われた、弱い者の味方になり、苦しむことをいとわなかった故徳永先生の『落穂拾い』の精神の私たちなりの継続だと思ふからだ。』

この文章をまとめるにあたって、最初の会議の中でこの文章を読み合わせしました。入って1年の職員にも、35年間の保育園生活を卒業した私にとっても、衝撃の瞬間でした。これにすべてが入っていると思いました。そこから、この論文作成のスタートを切れたことを幸いに思います。

- ①旭町保育園時代の保育を学ぶこと
 - ②子ども理解・子どもの育ちを中核に据えること
 - ③保護者との連携・協力、地域の子育て支援を位置づけること
 - ④保育の質の確保・向上において、保育園で働くすべての職員の専門的資質とチームワークや職員配置、保育環境の改善を位置づけること
- これが重要な視点だと考えます。



創立120周年記念実践報告会

二葉旭町保育園から二葉くすのき保育園へ

～くすのきのもとに育つ子どもたち～

実践報告担当者
中野志穂 中村由紀 蒔田結奈 竹下玉美 酒井奈美江

アドバイザー
二葉くすのき保育園前園長 八木澤眞理子
二葉くすのき保育園



1. 新宿から調布へ

- 2代目徳永忍園長の功績 都民栄誉賞女性第一号
→社会事業、保育事業に尽力され、『母』と慕われた
- 新宿旭町保育園の老朽化と回りがビル建設で谷間の保育園に昭和48年1月11日永眠⇒新宿旭町を離れる契機の一つ



旭町保育園の場所



徳永 忍

昭和30年代旭町保育園

1. 新宿から調布へ

- 2代目徳永忍園長から3代目堀越信子園長へ
- 調布市国領町の都営一階に移転
- 昭和52年4月開園



移転当初の写真



旭町保育園から移植した榎の木



堀越 信子

2. 子どもの育ちと環境作り

◆園舎設計で大切にしたこと
⇒ 室内も園庭も子どもがたっぷり遊べる空間

- 床暖房設備
- 様々な遊びが出来るゆったりとした各部屋の作り
- 身支度がゆっくりと出来る受け入れ室という空間
- 子どもの発達と興味に合わせた手作り遊具
- 外遊びの空間 乳児庭、幼児庭を区切る
- 3ヶ所の砂場と築山
- 各保育室前には芝生を植える
- 幼児庭には子どもたちと一緒に野菜を育てる畑





各クラスに受け入れ室を設置



2. 子どもの育ちと環境作り

- ◆園舎設計で大切にしたこと
⇒ 室内も園庭も子どもがたっぷり遊べる空間



3. ひとりひとりの人格を尊重する保育

- ◆保育園の環境を受け入れ、安心して過ごせるように

- 育児担当
 - 乳児クラスは特定の大人との強い結び付きが必要
 - いつも決まった職員が育児の世話をする
 - 特定の大人が愛情をもって育児することで愛着関係の構築



手作りの
クリスマスプレゼント



2. 子どもの育ちと環境作り

- ◆園舎設計で大切にしたこと
⇒ 室内も園庭も子どもがたっぷり遊べる空間



3. ひとりひとりの人格を尊重する保育

- ◆保育園の環境を受け入れ、安心して過ごせるように

- 3、4、5 歳児の異年齢混合保育を1997年から実施
 - 3年間同じクラスで過ごし、その中で様々な人間関係が生まれる
 - 情緒を豊かに自信へと繋がり、家族とは違う集団の中で人と人の繋がりが育まれる



野菜の課業 五感を使って



年長児が配膳も手伝います

2. 子どもの育ちと環境作り【園庭 春】



ローズマリーのメンバー



職員も昼の休憩中に園芸作業

4. わらべうたで育つ子どもたち

- ◆子どもの情緒が安定して育つた

- 旭町時代の昭和46年より「わらべうた」を音楽として取り入れた祖母や母からうたい継がれてきたのがわらべうた
- 素朴なうたやあやし言葉
- 音程の幅が狭い
- わらべうたの数がとても多い



2. 子どもの育ちと環境作り【園庭 畑】

- ◆保育園の環境を受け入れ、安心して過ごせるように



畑で野菜作り
水やりも子どもたちで



4. わらべうたで育つ子どもたち

- ◆幼児のわらべうた

- 乳児期と同様、子どもたちが「音楽を好きになる」リズム感や聴感など、音楽的能力を発達させるために「課業」を計画し実践
- 運動、言語、ルール感、対人関係など幼児期の基本的な発達を促す
- 集団でわらべうたをする中で、多様な感情や関わり方、コントロールの方法を経験して学んでいく
⇒成長の発達の過程でとても大切



父母の会・保護者と共に



こどもまつり



夕方から
保護者と一緒に
保育情勢学習会



シンボルマークを使った受け入れ室装飾



ご清聴ありがとうございました

5. 子どもたちに安全で望ましい食事を提供

- 乳幼児期は様々な食材や調理法を繰り返し経験していくことが大切な時期
 - 食材の味を覚える
 - の後の嗜好形成に大きな影響を与える大切な時期
- 小さな子ども達が口にする食べ物だからこそ地産地消、国産品を使用するなど大切
 - 出所のはっきりした食材を使う事
 - 子どもたちに、安全で望ましい食事を
- これらをモットーに開園当初から「食の安全を心がけた食材」を提供している



5歳児のとりくみ 田んぼ作り



田んぼ作り



6月
田植え



7月



9月



もみすり



10月

おにぎりづくり

5. 子どもたちに安全で望ましい食事を提供

◆こだわりの食材

牛乳	北海道の広大な土地で『遺伝子組み換えではない飼料』で育った健康な牛から絞った乳
米	長野県産無農薬あいがも栽培米こしひかりの七分づき米
魚・肉	近隣の商店から国内産限定した新鮮なもの
野菜	国内産で厳選。特に根菜類は放射能の影響に配慮し、九州方面の産地に限定している。
調味料・乾物・菓子類	化学調味料・保存料などの添加物を含まない、安心安全な自然食品を厳選
果物	国内産に限定し毎日納入



二葉むさしが丘学園 10年のあゆみ

～子どもとともに、地域とともに～

二葉むさしが丘学園

① はじめに

今回、二葉むさしが丘学園の10年の歩みを振り返り、これからの挑戦を改めて考え取りくんでいく機会ととらえ「礎づくりの10年とこれからの挑戦」としてこの10年間をまとめました。

② 二葉むさしが丘学園の概要

小平市にある二葉むさしが丘学園は本園60名定員、グループホーム、ファミリーホーム等4つの分園を持つ総定員84名の施設となっています。親子交流室、自活実習室2室を持っています。都立から引き継いだため、民間では珍しく、広い敷地と、体育館もあります。

二葉むさしが丘学園の出発は、10年前2010年4月、その1年前から引き継ぎを始めたところから始まります。

移譲の背景は、東京都側からは、利用者本位の徹底の為民間でできることは民間にゆだねるという方針でした。

一方で二葉の側からは、調布の狭い土地での児童養護の限界があり、今後の社会的養護の大きな役割を担う上で都立の設備はとて大きな魅力でした。

移譲期は、子どもはそのまま大人がすべて変わるため、子どもたちが一番混乱した時期でした。職員と子どもの対立構造を打破し生活を共に作っていくことに奔走しました。自分たちが正しいと思う事を繰り返し子ども達に伝え続けました。

最初の3年間は、移譲後の子どもの生活についてアンケート調査をする、丁寧に第三者委員に見ていただき、子どもたちの意見を大事に「ともに生活を作る」ために取り組んできました。第三者評価では

10年前の調査では施設満足度が3割程度だったものが今年の調査では8割を超える数字で表れています。

③ 移譲後の大きな取り組み

(1) 第一は、本体施設の改築です。

社会的養護をリードするにふさわしい、新たな出発の基地作りです。

今後長く働き続けるであろう若い職員を中心に「未来日記プロジェクト」という改築検討委員会を立ち上げ取り組んできました。都内に限らず施設見学や情報収集をしていき自分たちの目指す養護が出来る建物づくりを目指しました。

子どもたちとともに目指したのは、「みんなが安心して自分らしくいられる家、アドボカシーの実現できる家」「みんなが繋がれる家」「壁のない家」「地域とのつながりを大事にする家」でした。また子ども達からは園庭の遊具についての要望も出されそれを元に遊具の設置もしました。

(2) グループホームの開設

都立では「園外体験寮」と言う名称でしたがグループホームとして整備しました。

グループホームの必要性は、二葉学園が、全国でも先駆的に取り組んだ中で証明済みです。

移譲2年後に最初のグループホームを、翌年2つ目、そして、現在は3つのグループホームをもっています。

(3) ファミリーホーム「しろやま」の開設

二葉は1981年、約40年前に、今で言う「法人型ファミリーホーム」を実践しています。

平成28年の児童福祉法改正で、「家庭環境と同様の環境での養育」が子どもの権利として明記されま

した。法人の責任でファミリーホームを安定的に運営する責任に応える取り組みです。40年前の2つのホームと同様に、実子とともに住み込み、家庭に近い形で養育していきたいと言う職員夫妻を中心に進めています。

(4) 「一時保護委託事業」の開始

虐待など家庭においておけない、保護を必要とする子どもをいつでも受け入れる「一時保護」の施設の不足は、東京では深刻です。

必要な子どもたちがいる。できることには積極的に取り組む、「二葉の精神」の実現です。一時保護委託の定員を6名として取り組みを始めました。

その社会的必要性は、平成30年度の利用実績、述べ1800日以上という数字が証明しています。これ以前にも二葉むさしが丘学園として一時保護を定員に空きがある時には積極的に取り組んできました。これは子どもの命を守る事、児童相談所への協力と位置付けていました。

(5) 自立援助ホーム「トリノス」の開設。

これも、二葉学園との協力の中の取り組みの新しい成果と言えます。二葉法人の事業の中で社会に出る子ども達への支援が出来ることによって0歳から成人前までの子どもへの支援が途切れる事なく出来るようになりました。

4 子ども達への期待とともに作る生活

四つの理念

- ①子どもが健やかに育つ社会を作る活動をする
- ②話し合いの文化を育て子どもとともに生活を作る
- ③子どもが権利主体として自分らしく生きる力を育てる
- ④自らを高め社会のニーズにこたえられる職員を目指す

5 大切にしてきたこと実践の報告

(1) 安心安全の生活

どんなことでも相談でき、苦情が言える。アドボカシーの保障です。苦情が言える、丁寧に扱ってもらえることが安心・安全につながります。

子どもからの苦情や意見は、今年は40件以上になります。中には子どもの部屋に住む、ぬいぐるみの「こぐたん」からの可愛らしい投書もありました。苦情受付は子どもと一緒にその解決策を探ります。職員が解決するのではなく自分たちが出来ることを探っていくのです。その時だけでは解決には行きかず時間をかけて話し合っていく事も多くあります。

(2) 話し合いの文化作り…話し合いプロセス

子ども会議は部屋ごとにその時々話題や出来事について大人と子どもとで話し合いを行っています。議題は起きる時間やテレビの時間、困っていることなど様々です。自分たちで生活を作って行けるようにしています。学園で統一したルールは出来るだけ少なくし自分たちで心地よい生活を作っていけるようにしています。

また園全体にかかわる問題などは児童会などで話し合われます。

消費税が増額された時には子ども達からおやつ代を値上げして欲しいと意見が出てきました。その後児童会からは大きな子ども達の意見を中心にした提案が挙がってきました。

職員会議では児童会に対して小さい子の意見が反映されていないと差し戻しをしました。

その後再度児童会で話し合いが行われ小さい子の意見も含め提案を出してきました。それが

- ①毎日ごはんを残さず食べる
- ②部屋を掃除してからおやつ代をもらう
- ③一週間に一度職員を褒める ということでした。

最終的には職員会議で承認され現在のおやつ金額になりました。皆で決めるためのプロセスを大事にしています。

(3) 地域の中の二葉むさしが丘学園

「オープンカフェ」「青空祭り」は二葉むさしが丘学園を地域の方に知ってもらうために始まりました。オープンカフェは毎回違うテーマで地域の方を招いてゆったりと学園の事、子どものこと、里親の事、地域の事、等など社会的養護に関する事を多岐にわたって話しています。講師を招くこともありました。お茶を飲みながらこれまで平成27年からのべ30回開催しています。

青空祭りは移譲を受けた年から始めています。子

ども達の学校の友達や先生、地域の方たちなど、毎年200名を超える人たちが来てくれています。バザーやステージでの催し物、出店などを行い一昨年は改築終了を記念して餅まきをしました。

地域の老人ホームとの交流をして子ども達がステージで歌を披露したり不登校児のボランティアの受け入れをいってもらったりもしています。また地域の父の会などとも交流を持っています。

地域に根ざし、開かれた施設に成長するため、まずは地域の一員として、子どもや職員が地域とつながりを持つことを大切に考えています。

⑤ これからの二葉むさしが丘学園

(1) これまで大切にしていたことを継続し発展させる

まずはこれまで私たちが大切にしてきたことを継続、発展させていく事。今までと同様に子ども達と生活を作る事を続けていながら二葉むさしが丘学園の文化や伝統を作っていく行ければ良いと思います。その中心には安心安全の生活・話し合いのプロセス、地域に開かれた施設であることが常にある事が大切だと思います。

(2) 社会的養護における二葉むさしが丘学園の役割を意識して取り組む

子どもに必要な社会的養護に果敢に挑戦する二葉むさしが丘学園であること。新しい社会的養育ビジョンなど社会ニーズに応えながら、子どもに必要な社会的養護を様々な形で追及し、子どもとともに作る役割に挑戦する事が求められていると思います。

法人内の連携により、社会的養護を総合的に進め、必要な内容を創出していく役割を担います。

(3) 変化する勇気・新たな事へのチャレンジ

話し合いの文化、フラットな関係での協力・支え合う協働の力で、支えあいを元に、チャレンジを続け「安心の基地としての家」を追い求めて行きたいと思っています。

助言者から

都立時代から二葉時代のむさしが丘学園を見つけて

白梅学園短期大学教授 中山正雄

社会福祉法人二葉保育園設立120周年おめでとうございます。

元二葉学園職員として、その後も長くかかわりを持たせていただいている者として、この大きな記念の年に当たり投稿の機会をいただき誠に光栄であり御礼申し上げます。

1994年、子どもの権利条約を我が国が批准した年の夏休み、福岡県において「全国児童養護施設高校生交流会」が行われ、二葉学園から数人の高校生とともに参加しました。この集会では「子どもの権利条約」を子どもたちと一緒に学びました。その時に参加した福岡の児童養護施設の高中生たちが、施設での体罰などの人権侵害を訴えて声を上げたのは翌年の1995年5月でした。この集会で知り合った東京都立むさしが丘学園の養護係長から、大学教員になった私に連絡があり、1999年から施設の第三者評価委員となり、毎月1回訪問して第三者評価及び助言等を行っていました。

二葉が運営するとなった施設では、「もはや第三者委員とは言えない、身内だから」という意識がありました。移譲に伴う子どもたちの状況や職員の方たちへの支援をという思いで委員を続けました。二葉になってからは「どんな些細なことでも第三者委員に届ける」と、子どものトラブルや苦情、職員の困難への対応などの連絡がありました。ある時、子どもの親が児童相談所において「入所中に職員から暴力を受けた」と訴えました。10歳の男子が父親との関係を大事にして、父親が喜ぶように相槌を打っているうちに、「職員から暴力を受けたこと」になってしまったのです。この件は1年くらい前に「子ども同士のトラブル」がきっかけで職員がこの子に対応したことでした。私は、子ども本人と周りの子どもにも聞き取りをした当時の記録と資料に基づいて父親に説明をして誤解を解いたことがありました。

委員は、子どもの寮で一緒に夕食を取ります。子どもの苦情を受けて、子どもたちと話をし意見書を施設長に届けたこともあります。子どもの意見を大事にしている姿を見てきました。職員間では、経験等に左右されず一人一人の意見を大事にする運営の努力がされており、意見を出しやすくみんなで作る文化が根付いてきています。実践報告にある取り組みの評価の素はここにあります。そこにある課題は法人設立時からの「どんな時も子どもの姿に寄り添う」取り組みです。二葉の思想とも言うべきこの姿勢を今後も大事にしてほしいと願っています。



創立120周年記念実践報告会

10年のあゆみ

～子どもとともに、地域とともに～

礎づくりの10年とこれからの挑戦

アドバイザー 白梅学園短期大学教授 中山 正雄先生
発表者 里親支援専門相談員 高橋 和子

社会福祉法人 二葉保育園
児童養護施設 二葉むさしが丘学園

★児童養護施設 二葉むさしが丘学園



- 東京都の郊外、小平市に位置する児童養護施設
- 児童定員 本園60名

(総定員84名) 地域小規模児童養護施設(グループホーム) 6名×3ヶ所
法人型 ファミリーホーム 6名×1ヶ所

職員数 施設長 1名 専門職 9名 保育士指導員 53名
(職員数72名) その他 9名

- 施設設備 広い敷地を持つ、3年前に建て替えられた新しい施設です。体育館や事務棟、自活室などがあります。



★ 二葉むさしが丘学園～東京都立むさしが丘学園から二葉に移譲～

(背景)

- 1989年の出生率1.57ショック⇒減らない社会的養護のニーズと民間の柔軟性への期待 ⇒公立施設の民間移譲(都側)
- 将来への取り組み展望を聞く環境を得てチャレンジを (二葉側)

○ 10年以内の全面的建て替えを予定、次への礎づくりの10年間

(移譲期)

- 開設準備期を経て2010(平成22)年4月に完全移譲
児童はそのまま職員のみ全員変わる 最も混乱したのは子どもたち
- 生活する子どもの最善の利益を考慮した生活づくりを開始
⇒入所児童の生活アンケート調査を1年、2年、3年実施



★二葉むさしが丘学園～新たな取り組みの礎～

1. 本体施設の全面的改築

- *平成26年本園改築工事着工～平成28年完成
- *「未来日記プロジェクト」を創設して準備
～新しい家への期待と夢～

目指した家の実現

- 『アドボカシーの実現できる家』
- 『子ども職員も「繋がる」家』
- 『「壁」のない家』『地域との繋がり』



旧園舎



現在の園舎



★ 二葉むさしが丘学園～新たな取り組みとその実践～

2. 新しいグループホームの開設

- *平成24年 立山寮引越し
- *平成25年 榛名寮 開設
- *平成28年 楓寮開設

3. ファミリーホームの開設

- *平成31年 しろやま開設




★ 大切にしてきたこと
この10年間大切に築いてきた子どもたちとの生活

- ① 安全・安心の生活を作る
子どもの意見の尊重、苦情の解決、アドボカシーの保障
- ② 話し合いの文化の構築
全員参加の話し合いによる方針決定(寮会議/子ども会議・運営会議・職員会議)
全員で話し合い、皆で守る・護る
孤立させない、誰かのせいにならない。話し合いによる解決
- ③ 地域の中の二葉むさしが丘学園
地域の活動に積極的に参加(青少年対・民生委員 等)
オープンカフェ二葉
他機関との連携(児相・学校・子ども家庭支援センター・警察・病院 等)
青空まつり
「ネットワーク型組織」の構築



★ 二葉むさしが丘学園～新たな取り組みとその実践～

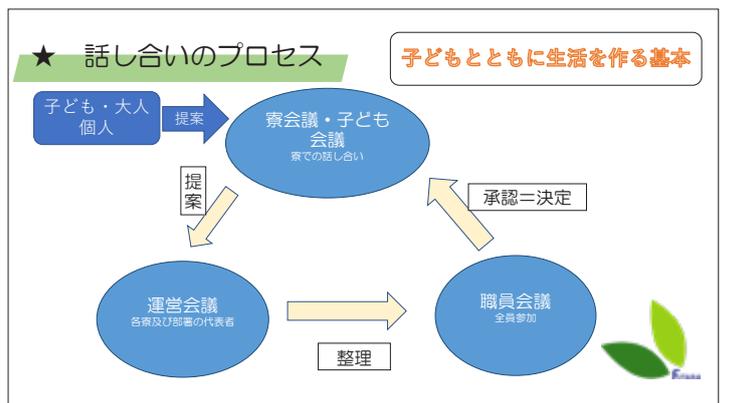
4. 平成28年 一時保護委託事業(本園定員内 6名)開始

- * 都内で唯一の事業
- * 開設当初から予想を上回る利用があった。

年間 延べ1800日を越える(平成30年度)利用実績

実際の子どもの声
「毎日が楽しかった。」「友達ができた。」「家でゲームとか携帯ばかりやってたのにここに来てからやらなくても平気だった。でも、早くゲームしたいけどね。」「話を聞いてもらえるのが嬉しい。」「ご飯がおいしい。」「勉強がいやだ。」「(平日は午前中に学習時間があるため)土日になると今までの人生で一番幸せを実感できた。」「学校に通い続けられてよかった。」「保護されるのは不安だけど、またここで(保護されて)よかった。」

* 退所後、私たちのことを思い出して、近況報告や進路相談に訪れる子ども…

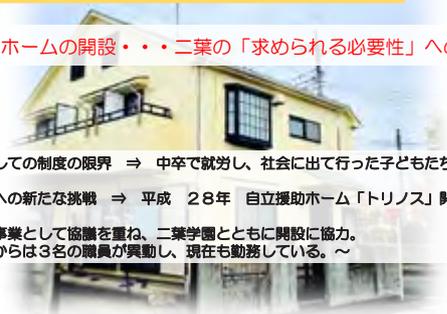
★ 二葉むさしが丘学園～新たな取り組みとその実践～

5. 自立援助ホームの開設・・・二葉の「求められる必要性」へのとりくみ

児童養護施設としての制度の限界 ⇒ 中卒で就職し、社会に出て行った子どもたちへの生活支援

社会的なニーズへの新たな挑戦 ⇒ 平成 28年 自立援助ホーム「トリノス」開設

～法人内の新規事業として協議を重ね、二葉学園とともに開設に協力。むさしが丘からは3名の職員が異動し、現在も勤務している。～




★ これからの二葉むさしが丘学園

都立から引き継ぎ 新たな展開にチャレンジする礎を築いた10年 → その礎の上に、社会的養護をリードする役割への果敢な挑戦を展望

- ① これまで大切にしてきた事を継続し発展させる事
これからも引き続き、大人も子どももそして社会も、安心して生活できることを目指して日々努力します。
⇒権利擁護、アドボカシーの保障、子どもとともに生活の向上を目指す、地域の子育て支援のリーダーシップ 等



★ 二葉むさしが丘学園
～子どもたちへの期待とともに作る生活～

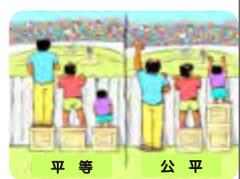
*「二葉むさしが丘学園」の理念

- 子どもが健やかに育つ社会をつくる活動をする
- 話し合いの文化を育て子どもとともに生活をつくる
- 子どもが権利主体として自分らしく生きる力を育てる
- 自らを高め社会のニーズに応えられる職員をめざす




★ これからの二葉むさしが丘学園

- ② 社会的養護における二葉むさしが丘学園の役割を意識して取り組む事
社会のニーズにいち早く対応し、地域に根ざした施設として、高機能化を目指します
⇒新規グループホームの開設、サテライト型児童養護施設、居場所支援 等
- ③ 変化する勇気・新たなことへのチャレンジ
話し合いの文化をゆるぎないものとし、新たな養護理念の確立を目指します。
⇒ひとりひとりに公平な養護を、フラットな職員体制、挑戦する機会とレジリエンスの保障 等




自立援助ホームトリノスでの 4年間の実践を通しての考察

自立援助ホームトリノス

① 自立援助ホームとは

自立援助ホームとは、何らかの理由で家庭にいられなくなった原則15歳から20歳までの青少年達に暮らしの場を与える施設（2016年児童福祉法改正により就学生については22歳まで可能となった）であるが、近年、児童養護施設を経ず家庭から直接入居する利用者が増加し、同時に児童養護施設の機能拡充・機能強化により役割が重なる面も出てきている。

② 自立援助ホームの現状

（1）開設の背景と趣旨

当法人は乳児院、児童養護施設を運営し、0～18歳の子どもの社会的養護ニーズに対応してきたが、近年、貧困や虐待など子どもたちが抱える課題が重篤化し、社会に出てからも様々な困難と向き合わなければならない状況に対し、幼少期・学童期・思春期から連続した自立支援の場の提供の重要性が増してきた。そこで、社会への出発点であるとともに再び帰ってくるができる実家として2016年に自立援助ホームを設立した。「トリノス」＝「鳥の巣」は、二葉が大木となり、その枝にできた鳥の巣から雛たちが巣立っていく様をイメージして名づけられた。

（2）4年間の取り組み

① これまでの利用者の概況

2019年末までの総入居者数は17名、入居時平均年齢は15.8歳、平均在籍期間は12.1ヶ月。うち中卒で入居してきた利用者は14名で、入居中に1名が高校卒業でき、1名が大学に進学した。退去者13名のうち、就労自立が7名、家庭復帰が4名等である。

② インテークとインケア

入居希望者との面談の際に、中卒で就労自立をすることはとても厳しいこと、就労自立で退去する場合、正規雇用が原則であること、親族との関係改善の可能性があれば話し合いをすすめることなどを伝え、本人了解のうえ入居誓約書の提出を受けている。入居後は、個別担当制をとり、退居までにやるべきことをチャート化した表を担当者が一緒に記入し、それを基に自立に向けた支援を進めていく。

生活支援は、全職員（4名）が健康管理、食生活、預金管理、掃除を担当している。退去者から、「体調を崩したがどうしていいかわからない」「食生活がひどい」「貯金がなくなった」「部屋がゴミ屋敷に多かった」といった相談が多かったため、4分野について全利用者月に一度個別支援を行っている。

健康管理については、月一度の面談を行い、心理状態や性に関する項目を含むチェックシートを用い、記入された回答をきっかけにして、性教育や心療内科につなげるといったことも行っている。食生活では、簡単な調理指導の他、惣菜や弁当の購入、外食への同行も行う。預金管理は、利用者が給料日に記帳後、次月の支出計画や貯金額について話し合う。掃除については、部屋の片付けとゴミの分別廃棄を職員と一緒にやり、習慣化していく。

その他にも、特に家庭で長年不適切な養育環境にあった利用者はそもそも基本的なマナーや生活習慣が身につけていない場合も多い。挨拶や身だしなみといったマナーについての掲示物をトイレや洗面所、玄関など生活の動線上に掲示したり、銭湯へ連れて行き、体の洗い方やひげの剃り方を教えたりと、利用者のプライドに配慮しながら指導していく。

これらの実施状況についても先述のチャート表に記載して、利用者の目標とする退居時期に対して今

どの時期にあるのか、どんな課題が残っているのかを見える化している。

就労支援については、利用者が自力で仕事を見つけることを原則に、ハローワーク、ネット検索、フリーペーパー、店頭広告といった方法を伝えるとともに、求職期間中には、自己分析シートの記入とそれに基づく職員面談を行い、自分の適性について利用者が考える機会を提供している。

③関係機関との連携

自立援助ホームでは予算が限られている中、寄付は運営上必要不可欠かつ自立支援の質の向上に直結している。フードバンクからの食材の提供、運転免許取得の助成金をはじめ、多くの団体・企業・個人からの寄付に支えられている。就労先としてつながりのある企業も4年間で10社を超えるようになった。

また、日野市社会福祉協議会には、開設準備期以来、民生委員や保護司、地元の自治会や市内の団体、福祉関連イベントや市民農園などとのつながりの実現により、トリノスが利用者の安心できる場所になるための基盤を作っていた。

④アフターケア

様々な生活課題に直面する退去者が多いことから、ホームのスマートフォンのSNSアプリを介して退居者といつでも連絡をとれる環境にあり、必要に応じて訪問面会支援を行っている。退居後1年未満の者には定期的にメッセージを送って近況を確認している。加えて誕生日や成人式などの際には連絡を入れて職員と外食をしたり、生活状況によっては、退居者へホームへの再入居を提案し、生活の立て直しや求職活動の支援なども行っている。

③ 支援の実践例

(1) 入居時18歳以上または入居中18歳到達のケース

A君：就労開始から1ヵ月ほどは真面目に働いていたものの、無断欠勤がちになり、結局三ヶ月ほどで退職、時間内に作業を終えられない、一度覚えた手順でないと作業ができないといったことや、そういったことをうまく伝えられないことなどから、職場に馴染めなかったその後いくつか就労先

をみつけたがどれも長く勤められず、トリノス職員からの勧めで、少し興味があると話していた自動車の普通免許の取得を目指すこととなった。無事に免許を取得できたA君は自信がついたのか新たな就労への意欲を示すようになり、以前より希望していた夜間の警備業に就職し退居、現在も同じ職場で勤務している。

B君：入居後すぐに運送関係の仕事に正社員として就労でき、勤務態度は良好、退居まで無遅刻無欠勤であったが、退去時に賃貸契約を結ぶ際に親権者の同意の壁がたちはだかった。親権者の協力は得られず、頼りになる親族もいなかった。そこで、ホーム側から就労先に事情を話したところ、こちらで借り上げてもらえることになった。

(2) 18歳未満で入居、退去時も18歳未満のケース

C君：中卒直後に入居しアルバイト就労したものの、労働時間増加に伴い体調不良・不眠が続き、心療内科に通院、その後より安定した生活を目指して2度正規雇用へ転職するが、プレッシャーからまた体調を崩し、2度とも退職となった。2度目の転職時はすでにホームを退居し一人暮らしだったが、退職を機に家に籠もるようになったため、本人と話し合いをした上で、ホームへ再入居となった。一人暮らしの中で、貯金が減ることが気になり、食費を削って1日1食カップ麺のみという食生活が体調不良の要因と判明した。再入居後、弁当や惣菜の購入、外食をうまく利用することを身につけるようにし、現在は何とか一人暮らし生活を継続中である。

D君：中卒直後に入居。ホームがお世話になっている地域の団体の関係者から職場を紹介してもらい早期に就労開始となった。縁故就労で、就労先とホームが密に連絡をとり、よく理解していただいた上で過大な配慮（通常社会では許容されないようなことにも寛大に対応）をしていただいた結果、社会人としての成長が妨げられてしまった面があった。複数回店長と揉め、最終的に解雇に近い状況で退職となった。その後初めての求職活動に戸惑ってしまった。

④ 支援から浮かび上がってきた課題と提言

中卒者、特に18歳未満を取り巻く厳しい環境下での支援の在り方が大きな課題となっていると感じる。

18歳以上になると、夜勤を伴う仕事、警備業、アルコールを提供する飲食業をはじめ、18歳以上が望ましいとされる危険を伴う業務や入寮して勤務するような仕事など、就業の選択肢が広がる。運転免許取得ができるとさらに就職に有利になる。

一方、18歳に満たない場合、以前は中卒者の受け皿となっていたような力仕事系の職場でも、リスク回避のために親権者同意書を求めることも増えている。賃貸契約での審査も厳しくなっており、18歳未満ケースはなかなか安定した就労先、住居を得ることが難しく、入居期間も長くなってしまふ。

このような中で、今後すすめていきたいのは、利用者の高校復学支援である。自立援助ホーム利用者の高校進学・通学に向けた就学支援はこれまでになく充実しつつある。さらに法人内の児童養護施設2施設との連携（自立援助ホームから養護施設へ）による支援にも取り組みたい。就労支援が原則である自立援助ホームからも高校通学の道は開かれつつあるものの、児童養護施設からの通学の方が利用者負担が少なくすむ。やはり高校を卒業したいという再チャレンジのチャンスを与えるうえで、自立援助ホームと児童養護施設の連携はこれからの1つのモデルになり得ると考えている。

助言者から

歴史の上にあるトリノスの実践の意義

十文字学園女子大学教授 潮谷 恵美

報告からトリノスの実践には社会福祉法人二葉保育園が取り組んできた子どもに必要な実践、社会的課題への挑戦、専門的援助が豊かに継承されていると捉えられた。

自立援助ホームは児童福祉法に事業として位置づけがある現在でも、その援助ニーズが広く注目され、かつ、十分に社会的支えがあるとは言い難い。しかし、本法人では17年前に事業に関わる提起と検討がなされ、事業開始までに時間を要しながらも、4年間の本実践報告に至っている。この経緯に、トリノスの職員をはじめとしてそこに関わってきたすべての人々に「創立以来の法人全体の理念」に基づいた働きがあったことがうかがえた。

特に報告の豊かな実践の中から2つの要点をあげる。

1つは児童福祉施設の援助対象でない児童の自立生活、就労に向けて生活の場の提供と援助が同時に行われていることである。周知のとおり児童福祉法において児童は「満十八歳に満たない者」である。しかし、児童養護施設等に入所していた児童が義務教育終了後で就学をしない状態で措置解除となり、養育や援助が日常生活の場で包括的に提供されていた施設から移動し、「自立生活」をせざるを得なくなることがある。併せて、その他の何等かの理由により生活の場の確保や援助が必要な困難に直面する児童もいる。報告ではこのような児童の援助ニーズに応じた援助が行われていた。具体的には生活の場の提供と生活の基本に関わる援助（食事の提供や生活上の相談、生活習慣や社会的スキルの習得、退所後の生活準備等）、保護者に関わる関連機関と連携した援助も行われていた。しかし、事業の種別、目的に即した援助が行われている。一方で、生活の援助や児童の発達を保障する育成環境の提供について他の児童福祉施設と同基準ではなく、制約がある。トリノスが実践してきたからこそその援助の試行錯誤や模索、問題提起も重要なことである。

2つ目の要点はインテークからアフターケアの過程に一貫した自己決定の尊重やストレングス視点、エンパワメント等が基本にあるソーシャルワーク実践である。ホームの役割に応じて利用者の基本的生活の構築と健康維持、就労（就学）に関わる問題やストレスの対処、必要な社会関係の形成と継続、社会資源の活用、就職就労継続を援助している。特に個別担当制での利用者と援助者の関係形成から、利用者とともに生活を計画し、その援助と危機対応があった。援助方法も対利用者への対面的援助、利用者と関係する人々や専門職、機関との連携など多様である。これらの実践は利用者の自立に向けて不可欠と捉えられる。

実践報告から今後の継続、向上を期待すると同時に、この意義ある実践が、関係する者だけでなく、広く社会的に様々な立場から支え、守る必要性も確認できるものであった。

創立120周年記念 実践報告会

自立援助ホームトリノスでの4年間の実践を通しての考察

実践報告担当者: 渡辺 剛史/宮崎 澄人/金崎 慎太郎/上原 ななみ
アドバイザー: 潮谷 恵美教授
(十文字学園女子大学 人間生活学部 幼児教育学科)



自立援助ホーム トリノス

2020/02/01

自立援助ホームとは

- ◆なんらかの理由で家庭等にいられなくなった、原則15歳から20歳までの青少年達に暮らしの場を与える施設（就学生の場合22歳まで可能）。
- ◆近年、児童養護施設等の利用を経ず家庭から直接自立援助ホームへ入居する利用者が増加。同時に児童養護施設の機能拡充・機能強化により役割が重なる面も出てきている。

2020/02/01

自立援助ホームの現状

(1)開設の背景と趣旨

- ◆乳児院、児童養護施設を運営し、0歳～18歳の子どもの社会的養護ニーズに対応してきた。
- 子ども達が抱える課題が重篤化し、幼少期から連続した自立支援の場の提供の重要性が増した。
- ⇒社会への出発点であるとともに再び帰ってくる事が出来る実家として2016年に自立援助ホームを設立した。
- ◆トリノス＝「鳥の巣」は二葉が大木となり、その枝にできた鳥の巣から雛たちが巣立っていく様をイメージして名付けられた。



2020/02/01

自立援助ホームの現状

(2)4年間の取組み

①利用者の概況

2019年末時点	
総入居者数	17名
中卒者	14名
入居者平均年齢	15.8歳
平均在籍期間	12.1ヶ月
退去者数	13名 (就労自立: 7名 家庭復帰: 4名 等)



自立援助ホームの現状

4

② インテークとインケア

● インテーク

- 中卒での就労自立について
- 就労自立での退去について
- 親族との関係改善について

- 入居希望者との面談の際にこれらを伝え、本人了解の上、入居誓約書の提出を受ける。



自立援助ホームの現状

8

● 18歳未満・中卒を取り巻く厳しい現状

18歳以上

- 就労の選択肢が広がる。
- 夜勤を伴う職/警備業 等
- 普通自動車免許を取得できる。

18歳未満

- 就労の選択肢が限定的。
- 親権者同意書を求められる事が多い。
- 就労/賃貸契約 等

自立援助ホームの現状

5

● インケア

➢ 健康管理

- 月1回、面談を実施。心理状態や性に関する項目を含むチェックシートを用いる。必要に応じて性教育を行ったり心療内科に繋げる場合もある。

➢ 食生活

- 調理指導・惣菜や弁当の購入・外食への同行なども行う。

➢ 預金管理

- 給料日に記帳後、次月の支出計画や貯金額について話し合いを行う。

➢ 掃除

- 居室の片付け・ゴミの分別/廃棄を職員と一緒にし、習慣化していく。



支援から浮かび上がってきた課題と提言

9

中卒者(特に18歳未満)を取り巻く厳しい環境下で支援の在り方が大きな課題となっている。

● 今後進めていきたい支援

- 利用者の高校復学支援
高校の進学/通学に向けた就学支援は充実しつつある。
- 児童養護施設との連携による支援
(自立援助ホームから児童養護施設へ)

自立援助ホームの現状

6

➢ 就労支援

- ハローワーク/ネット検索/
フリーペーパー/店頭広告等の方法を伝える。
- 履歴書の書き方/面接作法/
スーツの着方/自己分析シートの記入等も行う。

➢ ホーム内の掲示物

- 挨拶や身だしなみ等のマナーについての
掲示物を生活スペースに掲示。



ご清聴ありがとうございました。



自立援助ホーム トリノス

自立援助ホームの現状

7

③ 関係機関との連携

- ◆ 日野市社会福祉協議会始めネットワーク作り。
寄付は運営上必要不可欠かつ自立支援の質の向上に直結。

④ アフターケア

- ◆ ホームのスマートフォンのSNSアプリを介して退去者と連絡をとれる環境を作り、退去後1年未満の者には定期的にメッセージを送り近況の確認を行う。
- ◆ 必要に応じて訪問面会支援。
- ◆ 誕生日/成人式等のお祝い事の際に職員と外食へ。

社会福祉法人二葉保育園の歴史

明治 33 (1900)	野口幽香、森島（斎藤）峰が私立二葉幼稚園を東京麹町に設立。
明治 39 (1906)	四谷鮫河橋に二葉幼稚園を新築移転（園児 120 人）。（二葉南元保育園の前身）
明治 43 (1910)	園内で保母のためにキリスト教集会（東中野教会の前身）を毎週 1 回開催。
大正 5 (1916)	二葉保育園に改称。新宿に旭町分園（二葉くすのき保育園の前身）開く（園児 100 人）。
大正 8 (1919)	小学部を旭町分園に併設（生徒 70 人）。
大正 11 (1922)	小学部の公立化移転に伴い、学童保育、夜間診療所、廉売部を置く。本園に母の家設置。
大正 12 (1923)	関東大震災で分園焼失、本園は大破。14 年再建。
昭和 6 (1931)	野口園長のあとに徳永恕就任。
昭和 7 (1932)	スラム向けに 5 銭食堂、また夜学生に弁当をつくる。
昭和 10 (1935)	財団法人になり、理事長に徳永恕就任。深川海辺町母子寮を設置（65 世帯）。
昭和 20 (1945)	東京大空襲で深川母の家を焼失し 21 人死亡。本園も被災し、旭町分園のみ残る。
昭和 21 (1946)	旭町分園中心に事業を再開し、乳児部も開始（二葉乳児院の前身）。
昭和 22 (1947)	調布市上石原に分園設立、母子寮と養護部（二葉学園の前身）を置く。
昭和 25 (1950)	南元本園再開（保育園 43 人、乳児院 15 人、母子寮 10 世帯）。
昭和 26 (1951)	上石原分園焼失、再建（母子寮をやめ、養護部 50 人）。
昭和 31 (1956)	南元本園に母子授産の家開設。38 年廃止。
昭和 39 (1964)	社会福祉法人になる。
昭和 43 (1968)	上石原分園を改築し、養護部を二葉学園と改称。
昭和 48 (1973)	徳永理事長永眠。梅森公代理事長就任。
昭和 52 (1977)	旭町分園を調布市国領町に移転し、二葉くすのき保育園として発足（園児 100 人）。
昭和 56 (1981)	二葉学園に第 1 分園設置、グループホームの試行を始める。
昭和 61 (1986)	二葉乳児院養育家庭センター開設。二葉学園第 2 分園設置。
平成 12 (2000)	二葉乳児院で新宿区の子どもショートステイ事業開始。
平成 14 (2002)	二葉乳児院老朽化により全面改築。
平成 15 (2003)	二葉学園が狛江市の委託を受けて子どもショートステイ事業を開始。 二葉学園が地域小規模養護施設を開始。定員 6 名。二葉学園第 3 分園設置。 二葉乳児院が新宿区の委託を受けて、地域子育て支援センター事業を開始。
平成 17 (2005)	二葉学園に第四分園設置。
平成 18 (2006)	天皇皇后両陛下、二葉南元保育園および二葉乳児院をご視察。 二葉学園第 5 分園設置。 野口幽香賞を創設し、里親制度の推進に貢献した鈴木祐子二葉乳児院長に贈呈。
平成 19 (2007)	二葉学園第 6 分園設置。
平成 21 (2009)	遠藤久江理事長就任
平成 22 (2010)	二葉むさしが丘学園 移管設置
平成 25 (2013)	二葉学園本園舎 改築
平成 26 (2014)	二葉南元保育園・法人本部 園舎改築
平成 27 (2015)	二葉学園が多摩市の委託を受けて子どもショートステイ事業を開始。
平成 28 (2016)	自立援助ホーム トリノス 開設
平成 28 (2016)	二葉むさしが丘学園 改築完了（平成 26 年より三期工事）
平成 29 (2017)	二葉学園第 7 分園設置。
平成 31 (2019)	二葉学園第 8 分園設置。 二葉むさしが丘学園 ファミリーホーム「しろやま」開設。
令和 1 (2019)	井上従子理事長就任（2019 年 6 月 26 日）
令和 2 (2020)	120 周年記念礼拝（2020 年 2 月 1 日）於：日本基督教団 番町教会 120 周年記念行事の一環で「野口幽香賞」を再整備し、懸賞化。第 1 回受賞者：片野清美さん
令和 2 (2020)	二葉乳児院 江戸川区児相及び荒川区児相からフォスタリング機関事業を受託（4 月～） 二葉学園 東京都多摩児童相談所からフォスタリング機関事業を受託（10 月～）

120周年記念会アルバム



日本キリスト教団番町教会 野口幽香先生は所属されていた番町教会でチャリティーコンサートを行い、二葉幼稚園の建設資金を得られました。その御縁で120周年記念式の会場として礼拝堂を御提供いただきました。



司式をお務めくださった浦上充牧師
(東中野教会)



主催者挨拶を行う井上従子理事
長



ご祝辞を頂いた谷田治東京都
福祉保健局少子社会対策部長



ご祝辞を頂いた
吉住健一 新宿区長



礼拝堂に集う参加者



記念講演をしてくださった佐藤優先生



記念礼拝のために使わせていただいた番町教会の素敵な礼拝堂



役員全員による120周年の祈り



片野清美さんと野口幽香先生と森島峰先生のお写真



二葉の全施設の実践を各施設10分ずつ発表しました



各施設の報告に専門的助言をくださったアドバイザーから一言ずつ頂きました



二葉南元保育園の報告



二葉くすのき保育園の報告



二葉乳児院の報告



二葉学園の報告



二葉むさしが丘学園の報告



トリノスの報告



和やかな雰囲気の中、交流会を行いました



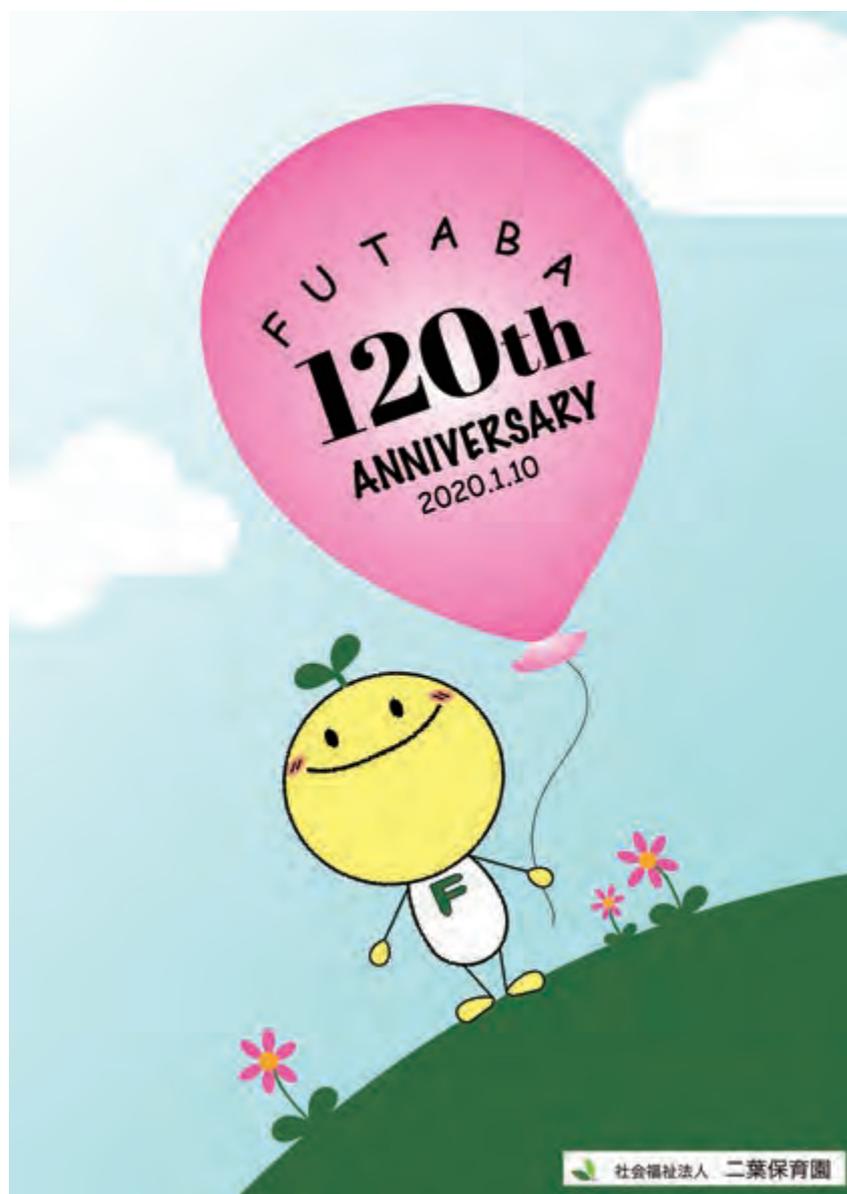
報告に聞き入る参加者



地域の支援者等も集っていただきました



当日、司会・進行・各部責任者となった施設長たち 終わって安堵の表情



二葉保育園 120周年記念誌
「子どもと共に生き 子どもと共に育つ」

2021年3月発行

社会福祉法人 **二葉保育園**

〒160-0012 東京都新宿区南元町4 TEL: 03-3341-1205
